論　文

アク・ベシム遺跡第２シャフリスタン地区出土土器の年代学的検討

山　藤　正　敏※

※　独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所

はじめに
Ⅰ．アク・ベシム遺跡における土器編年研究
Ⅱ．第２シャフリスタン地区における2015年発掘調査の概要
Ⅲ．第２シャフリスタン地区における2015年発掘調査の出土土器
Ⅳ．第1シャフリスタン地区出土の土器
Ⅴ．第２シャフリスタン地区2015年調査区文化層の年代再考
おわりに

はじめに

現在のキルギス共和国北部、チュー渓谷東部におけるチュー川南段丘面上の開析扇状扇端に立地するアク･ベシム遺跡はその古代名をスイヤーブ（Suyab）といい、７～８世紀には唐帝国により「砕葉鎮城」が設置されたと考えられてきた（Clauson 1961; 内藤 1997：151-158）。アク・ベシム遺跡は、宮城（ツィタデル Citadel）、内城（第１・２シャフリスタン Shakhristan）及び外城（ラバト Rabat）から成るが、主な考古学調査は遺跡の核をなす２つのシャフリスタンとその周辺に集中し、その断続的な居住史を明らかにしてきた（Бернштам 1950; Кожемяко 1959: 72-73; Семенов 2002; ケンジェアフメト 2009; Kyzlasov 2010; 山内他 2012, 2013, 2014, 2017, 2018, 2019; Vedutova and Kurimoto 2014; Abe 2014; 山内・アマンバエヴァ編 2016; 山藤他 2016; 城倉他 2016; 山藤 2017a; Yamafuji et al. 2017; 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所編 2020, 2021; 城倉他 2020）。

第１・２シャフリスタンは遺跡全体のほぼ中央を占めている（図１）。西の第１シャフリスタンは平面不整四角形で約 35 ha の規模であり、東壁は長さ 500 m、西壁が長さ 400 m、北壁は外側に彎曲しており長さ 600 m、そして、南壁は中央部で内側に大きく凹み、長さが 700 m である（Кожемяко 1959: 72-73）。南城壁のほぼ中央に沿って、外形と相似形（東西約 300 m ×南北約 220 m）に高まりが見られる。この範囲は元来地形的に高まった場所であったと思われるが、その文化層堆積は最も厚いところで約 7.5 m にも達し、表土から地山までは 8.5 m にもなる（Kyzlasov 2010: 263）。第１シャフリスタンの南西隅部にはツィタデルが存在する。これは、君主の居館と考えられており、近傍のクラスナヤ・レーチカ遺跡やチュー渓谷西部のアスパラ遺跡にも同様に認められるように、７～８世紀の中央アジアの大型拠点都市に特有の施設である（ケンジェアフメト 2009：240）。アク・ベシム遺跡のツィタデルは、基部で 60 m 四方、高さ約 8 m の土盛としてシャフリスタンの城壁上に残されていた。1996～1998年に行われた発掘調査の結果、７～８世紀に初めて築造され、10～11世紀に至るまで度重なる改築が行われていたことが判明した。

第１シャフリスタンの東には第２シャフリスタンが隣接する。第２シャフリスタンは不整五角形を呈しており、面積は約 60 ha を測る。第１シャフリスタンの東側に接続する形で建造されており、第１シャフリスタンと西壁を完全に共有している。西壁は長さ約 870 m、北東壁は長さ約 900 m、東壁は長さ約 850 m、南東壁は長さ約 500 m で全て直線形であるが、総長約 850 m の南西壁だけは西壁南端へ取り付く部分で長さ約 180 m にわたり西北に屈曲していた。なお現在では、東壁と南東壁の一部及び西壁の第１シャフリスタンとの共有部分を除いて、耕作により削平されてしまった。城門は、第１シャフリスタンと接続する西壁の２つの城門以外では、北東壁の西寄りに１ヶ所、北東壁と東壁の接続部分に１ヶ所、東壁北寄りに１ヶ所、南東壁西寄りに１ヶ所、また南西壁屈曲部に１ヶ所が確認されている。第２シャフリスタンのほぼ中央部は平行四辺形の内城壁（東西約 250 m ×南北約 320 m）で囲われており、元来、都市の中枢部がここに所在したと考えられる。なお、第２シャフリスタンの文化層堆積は概して薄く、地表下 1.5 m に及ばないと思われる（cf.

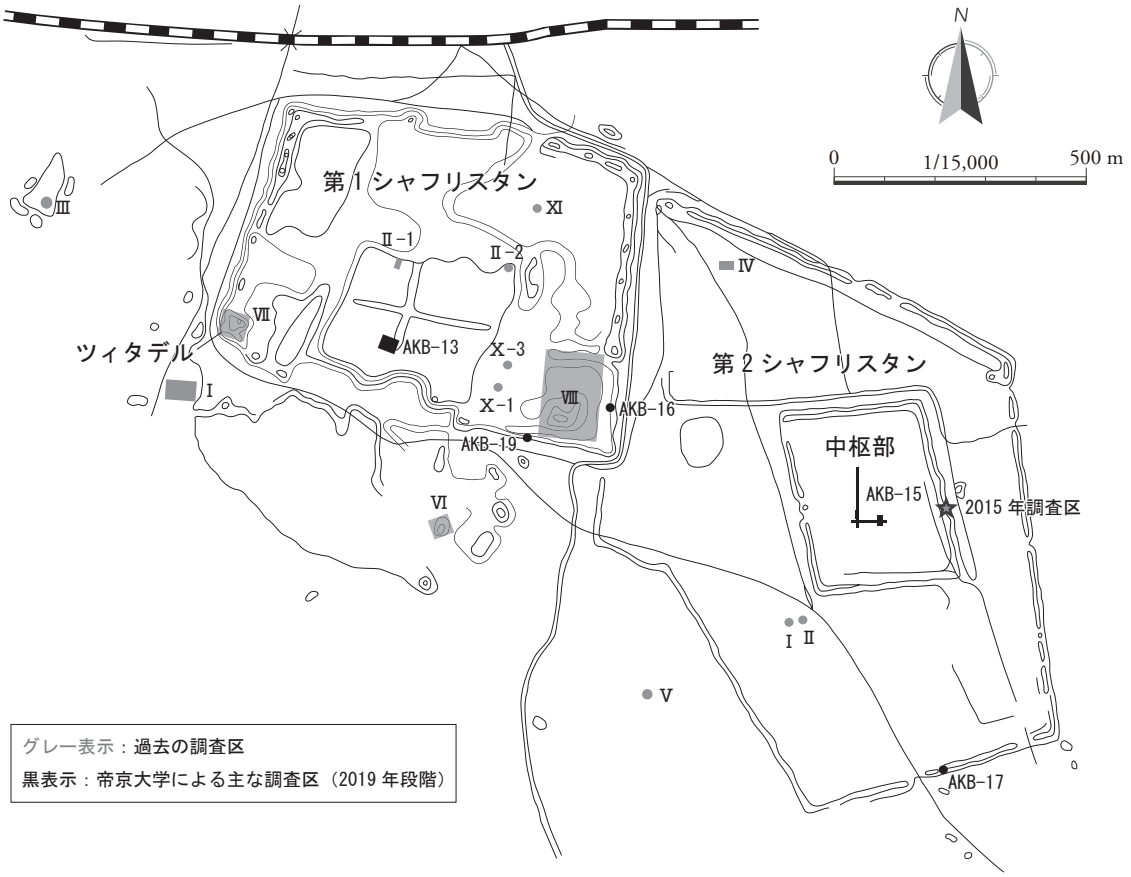


図１　アク・ベシム遺跡シャフリスタンの構造と既調査区の位置（Бернштам1950: Табл. 18 に基づき一部改変）

Бернштам 1950: 48）。なお、この第２シャフリスタンにおいて、1982 年に杜懐寳碑が地元民により発見された。安西副都護であった杜懐寳が亡き母のために一佛二菩薩を造らせた旨を記した同漢文石碑は682 年頃に作られたと推定され、「碎葉鎮」の文字がはっきりと刻まれている。これは『大唐西域記』巻１において言及されている「素葉」あるいは「碎葉」（スイヤーブ）と同一であり、アク・ベシム遺跡こそがスイヤーブであることがここに証明されると同時に、第２シャフリスタンこそが唐帝国によって築かれた碎葉鎮城であった可能性が高まった（内藤 1997：151-158）。

2015年11月、唐帝国による碎葉鎮城の考古学的証拠を掴むべく、A. N. ベルンシュタムによる発掘調査から実に75年ぶりに、東京文化財研究所と早稲田大学により第２シャフリスタンの発掘調査が実施された（山藤他 2016; 城倉他 2016; 山藤 2017a; Yamafuji et al. 2017）。この調査により、点数は少ないものの出土コンテクストが良好な土器群が層位的に出土した（城倉他 2017, 2018; 山藤 2017b）。これらの資料自体は既報告ではあるが、総合的な考察に欠いたため、その年代的位置づけの確定にはあと一歩至らないままであった。そこで本稿では、これまでの報告を改稿・統合した上で新たな考察を加えることで、第２シャフリスタンの利用時期を明らかにすることを目的にする。これにより、近年積極的に展開されている帝京大学による発掘調査成果と併せて、碎葉鎮城の年代的な証明とその実像を解明するための足掛かりとしたい。

Ⅰ．アク・ベシム遺跡における土器編年研究

アク・ベシム遺跡とその周辺地域における土器編年は、研究初期における大規模な層序的発掘調査により大枠が確定された。ベルンシュタムによる最初の調査は、層序の薄い第２シャフリスタンで行われたため、出土土器による編年を組むには至らず、概略的な記載にとどまっている（Бернштам 1950）。1953～54年にはL. R. クズラソフにより第１シャフリスタンに２ヶ所の試掘トレンチが設けられ（第Ⅱ

調査区）、地表下 7.5 m にも及ぶ 20 数枚の文化層堆積が確認された（Кожемяко 1959: 23; Kyzlasov 2010: 263; ケンジェアフメト 2009：253-254）。この調査により認識された文化層は大きく４つに分けられ、最下層の第１層は５～６世紀（ソグド商人のチュー渓谷への進出期）、第２層は７～８世紀（突厥・唐安西四鎮・突騎施時代）、第３層は９～10世紀（カルルク時代）、また、最上層の第４層はカラハン朝時代の撹乱層とされた。同時期の P. N. コジェミャコによるチュー渓谷全域の調査では、18ヶ所の中世都市遺跡と44ヶ所の小集落遺跡が調査・記録されたが、このうち都市遺跡15ヶ所及び小集落遺跡７ヶ所において小規模な試掘調査（６～10㎡）も行われた（Кожемяко 1959: 22）。コジェミャコは、クズラソフによるアク・ベシム遺跡第Ⅱ調査区から層位的に出土した土器群を核としながらも、上記の諸遺跡からの成果を総合して、チュー渓谷における土器型式の年代別の特徴をまとめている（Кожемяко 1959: 23-64）。すなわち土器群は、６～８世紀（テュルク時代）、８～10世紀（カルルーク時代）、10～12世紀（カラハン朝時代）の３時期に区別され、それぞれの時期の技法別（非回転台・ロクロ成形／回転台・ロクロ成形）・主要器種別に型式的特徴が明示された。大きな特徴として、時期が降るにつれて、大量生産のための形態の規格化が進んだことや、回転台・ロクロ成形の土器の比率の増加、また、８～10世紀における施釉陶器の出現と10～12世紀における普及が指摘された。その後21世紀初頭にかけてのアク・ベシム遺跡とその周辺の発掘調査は、この土器編年体系に概ね基づいて、年代のわかる貨幣の層位的出土情報を併せつつ、時期別の土器型式・様式に関する理解を漸次アップデートしてきたとみられる（e.g., Семенов 2002; Vedutova and Kurimoto 2014; コルチェンコ 2016）。このため、コジェミャコのような出土土器の体系的な記述は各報告には見られず、概略的な説明に留まっている。

近年では、2012～2014年に行われた東京文化財研究所による第１シャフリスタンの発掘調査は、カラハン朝時代の土器群の特徴を新たな切り口から示している（間舎他 2016）。調査報告では、土器群は「調理土器」、「素製土器」、「磨研土器」、「施釉陶器」に分類されたが、対象土器は最上層から出土した資料のみであるため、製作技術的・型式的変遷は議論されていない。なお、同土器群が出土した文化層は、^{14}C 年代測定によって10世紀に位置付けられた（中村 2016）。

2016年以後は、新たな土器編年研究が日本隊により実施されてきた。2015年秋季に東京文化財研究所と早稲田大学が共同で実施した第２シャフリスタンにおける発掘調査により層位的に出土した土器群の年代を確定させるために、筆者は、出土土器の器種及び製作技法・混和材に基づく分類とその変遷の確認、また、既往調査による出土土器との比較を実施してきた（城倉他 2017, 2018; 山藤 2017b）。本研究の内容は以下で論じるのでここでは詳述しないが、一連の分析により、第２シャフリスタン最下層出土土器が６世紀まで遡りえる可能性と、上層の土器群がカラハン朝時代に属することを指摘した。また、2016年から帝京大学文化財研究所により継続的に実施されているアク・ベシム遺跡の発掘調査成果に基づいて、櫛原功一は７世紀後半から12世紀前半に至る５段階（上層から、アク・ベシムⅠ～Ⅴ段階）の新たな土器編年案を提示した（櫛原 2020）。この編年は、土坑を中心とした各種遺構から出土した土器群を対象としており、日本考古学における伝統的な土器研究法である、各土器器種の型式学的系統関係に基づく組列と、各段階における土器様式の認識に基づいている。さらに、分析対象とした土器群に対して、各遺構で測定された ^{14}C 年代値を割り当てることで、ほぼ１世紀毎の型式・様式変遷の把握に至っている（山内他 2019：166-171；櫛原 2020）。このようにして構築された精度の高い土器編年案は、今後周辺地域において土器研究を新たに進めるための下地を用意したと評価できるだろう。

Ⅱ．第２シャフリスタン地区における2015年発掘調査の概要

本稿の主題である出土土器の年代について論じる前に、対象資料が出土したアク・ベシム遺跡第２シャフリスタン地区（旧称ラバト地区）における2015年の発掘調査（以下、第２シャフリスタン地区2015年調査区）の成果概要について簡潔にまとめておく。

第２シャフリスタン地区2015年調査区は、第２シャフリスタン中央に位置する長方形区画（中枢部）東辺のほぼ中央を横断するように設定され、その規模は東西 20 m、南北２ m を測る（図２）。発掘調査

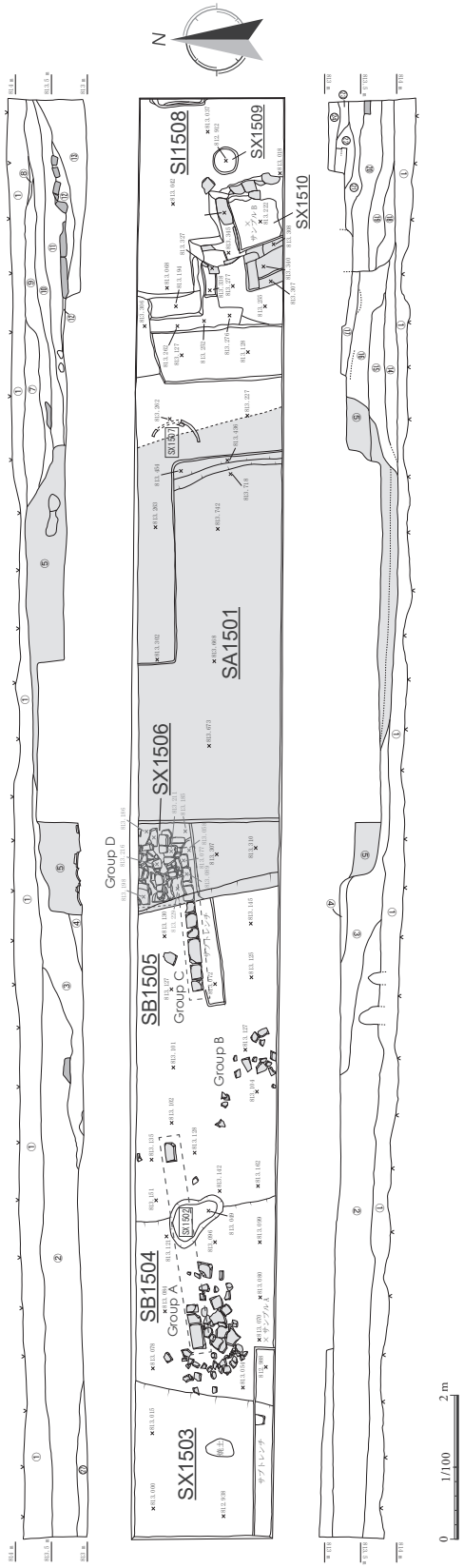


図２　第２シャフリスタン地区2015年調査区平面図・土層図（城倉他 2016：図11を一部改変）

では、耕作地となっていた地表面から約20㎝程度掘削したところで、トレンチのほぼ中央に赤褐色の硬化部分を検出した。この硬化部分を残してこの東西両側を掘り下げたところ、この硬化部分は東西幅約６m（北壁で東西幅 6.6 m、南壁で東西幅 6.65 m）、残存高約 0.6 m を測る城壁（SA1501）であることが判明した。おそらくは中枢部の内城壁であったと推測される。SA1501 の西側には硬化面が広がり、中国系と思われる２つの東西塼列（SB1504・SB1505）や２つの瓦集中（Groups A・B）が検出された。なお、東西塼列（SB1505）は内城壁（SA1501）の西辺に接していたため、接続状況を確認するために城壁の西北部に対して断割調査を実施したところ、東西塼列（SB1505）が内城壁（SA1501）内にも続くことが明らかになった。さらに、東西塼列（SB1505）の城壁内延長部分の北側には、新たな中国系瓦集中（Group D）が一部覆いかぶさるように検出された。Group D は凸面を上にして意図的に積まれており、他の瓦集中とは様相を異にする。以上の諸遺構は、中国的な特質を持ち、日用的な要素を全く含まない点を考慮すると、「官衙」的な性格を帯びたものであった蓋然性が高い。なお、調査区西端には、硬化面を壊す大土坑（SX1503）が確認された。

内城壁（SA1501）の東側の様相は、西側と全く異なっている。東側では硬化面は認められず、日干レンガによる壁体、黒変した床面と小土坑（SX1509）、また、カマド様焼土遺構（SX1510）などの遺構が検出され、全体として日常的な居住空間が広がっていたと考えられる（SI1508）。この空間からは日用土器片が出土しているが、西側で見つかった中国系瓦塼類はほとんど出土していない。以上から、東側で見つかった一連の遺構は、内城壁（SA1501）廃絶後に営まれた住居に伴う痕跡であろう。

Ⅲ．第２シャフリスタン地区における2015年発掘調査の出土土器

第２シャフリスタン地区2015年調査区の、表土層を除く文化層から出土した土器は、胴部片も含めて総数わずか64点であった。その大多数は小片であり、１点のみが口縁部から底部まで形状を復元できた。これらの土器片は、以下の３つの文化層（第Ⅱ～Ⅳ層）から出土した（図３）。第Ⅱ層は表土直下の堆積層（図２土層図②～④、⑦～⑪、⑭～⑳）であり、

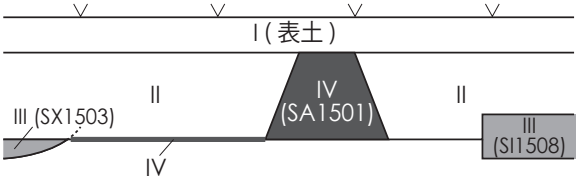


図３　第２シャフリスタン地区2015年調査区における文化層区分の模式図

第２シャフリスタン廃絶後に堆積した土層と考えられる。第Ⅲ層は、内城壁（SA1501）廃絶後に東側に設けられた住居址（SI1508）及び西側の廃棄土坑（SX1503）内の堆積である（図２土層図⑫、⑬、㉑～㉔、㉗）。現在のところ最下の第Ⅳ層は、内城壁（SA1501）及びこれに伴う西側の硬化面を指す（図２土層図⑤）。以下では、この文化層区分に基づいて、全ての記述を進めることにしたい。

１．土器群の分類と出土傾向

出土土器は64点と極めて少ないが、文化層別の技術的特徴を把握するにあたって、いくつかの土器群に分類することは有効と考えられる。こうした考えに基づき、色調、全体的な質感、焼成方法、成形技法、器面調整、混和材、器種等に着目して、９つの土器群を分類した（表１）。以下では、土器群に基づいて議論を進める。

続いて、９つの土器群の文化層別の出土傾向を把握しておきたい（表２）。第Ⅱ層では、計24点の土器片が出土した。１群が圧倒的多数を占めており、特に 1a 群が10点と最も多い一方、1c 群及び 1d 群が極端に少ない。また、３群・５群・９群はこの文化層でしか認められない。この他、調理用と思しき６群の土器片が４点認められた。

下層の第Ⅲ層では、計 35 点の土器片が出土した。上層の第Ⅱ層と同じく１群が多いが、中でも丁寧な造りの 1c・1d 群が最多を占めている。また、2・7・8 群はこの層のみで見られる。特に８群は、絶対数としては少ないが相対的に無視できない数が出土しており、同文化層において特徴的な存在と言える。なお、6 群は第Ⅱ層と同じく４点のみが認められた。

最下の第Ⅳ層からは、土器片４点のみが出土した。上層では見られない、還元焔焼成の４群が含まれるのが特徴である。

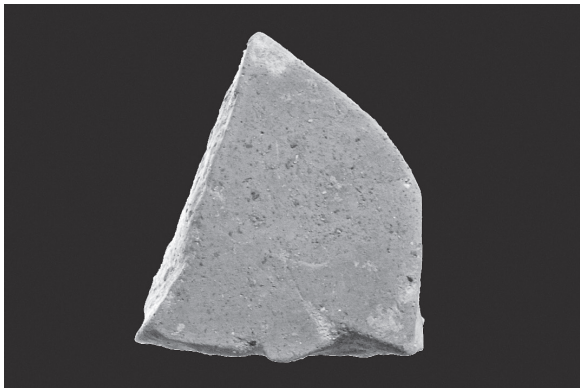
以上から、２つの点が明らかである。まず、全体として１群の土器が多数を占めてはいるものの、下層の第Ⅲ層ではより丁寧な造りの 1c・1d 群が多く、上層の第Ⅱ層ではより簡素な 1a・1b 群が多数を占める傾向が看取された。また、土器片の出土数は、最下の第Ⅳ層では極端に少ないのに対して上層の第Ⅱ・Ⅲ層では多く、調理用土器と思しき６群も出土した。こうした出土傾向から、第Ⅱ・Ⅲ層が日常的な活動を示すと考えられる一方、第Ⅳ層ではこれとは異なる性格の活動が行われていたことが示唆される。

２．文化層別出土土器

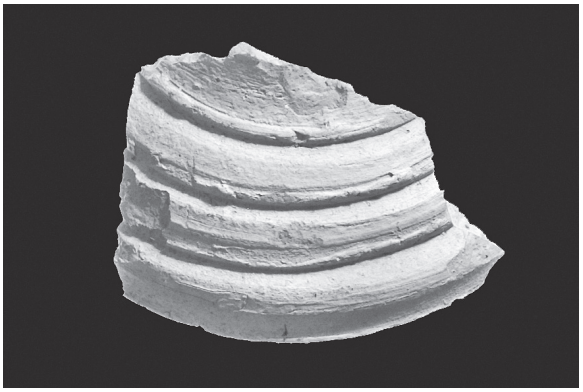
上記で示した出土土器のうち、形態を復元できるか、あるいは型式的に特徴のある12点を図５に示す。以下では上層より文化層別に出土土器について説明する。

表１　出土土器群の分類【第２シャフリスタン地区2015年調査区】

土器群	図版	出土点数	色調	質感	焼成方法	成形技法	器面調整の特徴	混和材	器種	その他
1a	4: 1	15	橙色	普通～精良	酸化焔	ロクロ成形	外面にナデのみ	–	–	
1b	4: 2	11	橙色	普通～精良	酸化焔	ロクロ成形	外面に白色ウォッシュとナデ	–	–	
1c	4: 3	7	橙色	普通～精良	酸化焔	ロクロ成形	外面にケズリ	–	–	
1d	4: 4	8	橙色	普通～精良	酸化焔	ロクロ成形	外面に白色ウォッシュとケズリ	–	–	
2	4: 5	2	暗色系	精良	酸化焔	ロクロ成形	–	–	–	精製土器
3	4: 6	2	橙色・淡黄色	普通	酸化焔	ロクロ成形	–	–	薄手	
4	4: 7	1	灰色系	精良	還元焔	ロクロ成形	内外面ともロクロナデ	–	–	精製土器
5	4: 8	1	橙色	普通～精良	酸化焔	手捏ね成形	–	–	小型	
6	4: 9	8	鈍い褐色	粗製	酸化焔	粘土紐輪積み成形	不規則なナデ	–	–	器面に煤痕あり、調理用土器
7	4: 10	1	鈍い橙色	粗製	酸化焔	手捏ね成形	–	–	大型	
8	4: 11	5	橙色	かなり粗製	酸化焔	–	–	スサ（切り藁）（多量）	–	
9	4: 12	1	灰黄色	粗製～普通	酸化焔	–	–	長石・砂粒（多量）	–	

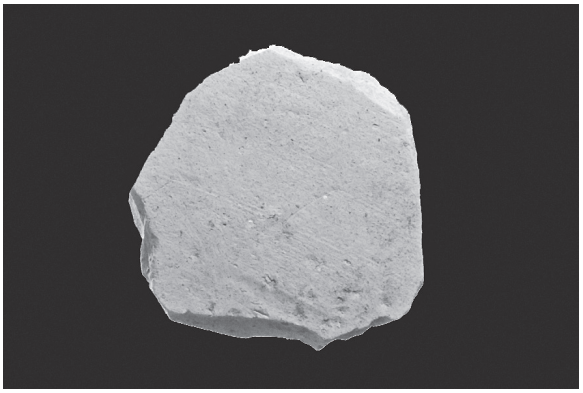


1: Ia 群土器（第 II 層）【外面】



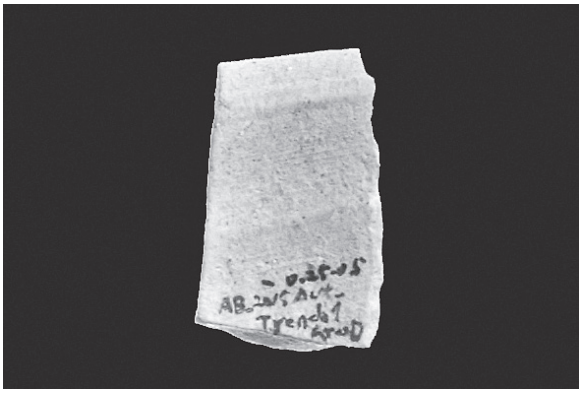
2: Ib 群土器（第 III 層、図 5: 8）【外面】

3: Ic 群土器（第 III 層）【外面】



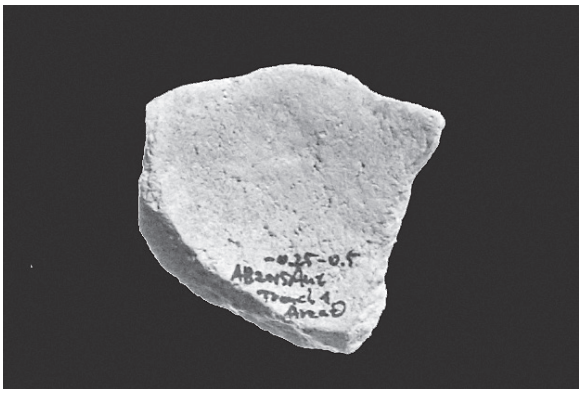
4: Id 群土器（第 III 層）【外面】

5: 2 群土器（第 III 層、図 5: 5）【外面】

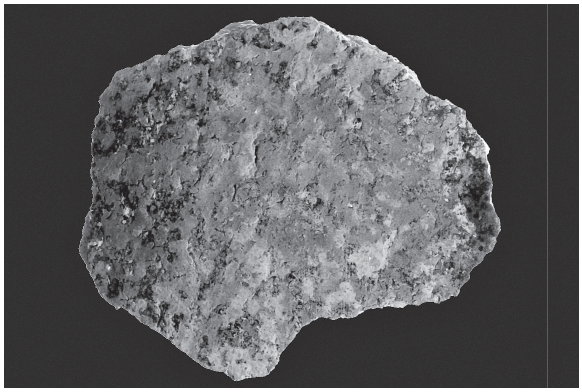


6: 3 群土器（第 II 層）【内面】

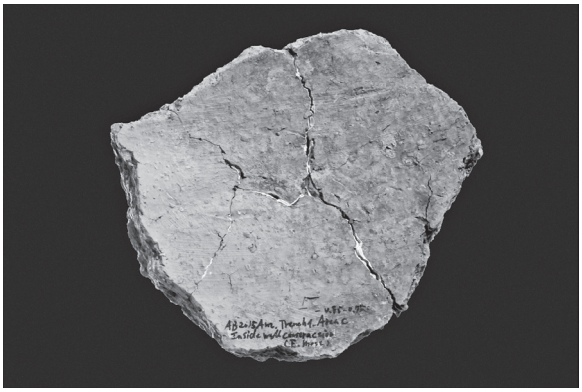
7: 4 群土器（第 IV 層）【外面】



8: 5 群土器（第 II 層）【内面】

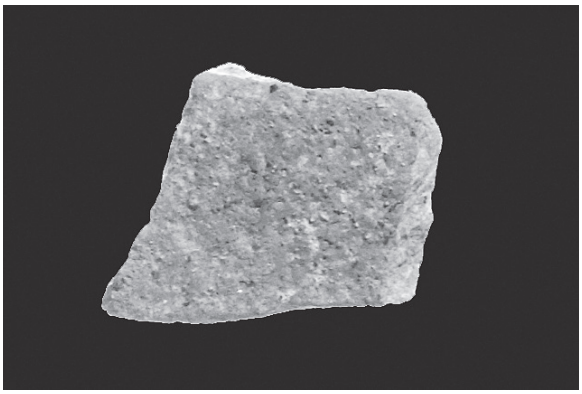


9: 6 群土器（第 III 層）【外面】



10: 7 群土器（第 III 層）【内面】

11: 8 群土器（第 III 層）【外面】



12: 9 群土器（第 II 層）【外面】

図４　第２シャフリスタン地区2015年調査区出土土器群

表２　各土器群の文化層別出土傾向【第２シャフリスタン地区 2015 年調査区】

名称	文化層	種別	土器群											
			1a	1b	1c	1d	2	3	4	5	6	7	8	9
AreaA_地表下-0.25-0.5m	II	堆積	3	3				1			1			
AreaB_地表下-0.25-0.5m	II	堆積	3											1
AreaD_地表下-0.25-0.5m	II	堆積	4	2		1		1		1	3			
AreaD_UpperLayer	III	住居址上堆積	1	2	1	2								
AreaD_地表下-1.13m	III	住居址内堆積	1	1									1	
AreaD_Floor(SI1508)	III	住居址床面	1	1	1	2					1			
AreaD_SX1510	III	住居址内カマド			1		2						4	
AreaC_地表下-0.75-0.85m	III	住居址上堆積									1	1		
AreaC_地表下-0.80-0.95m	III	住居址上堆積		1										
AreaA_SX1503	III	廃棄土坑	1		4	3					2			
AreaC_Subtrench&Floor	IV	ラバト内城壁 西側構築面	1	2					1					
総計			15	12	7	8	2	2	1	1	8	1	5	1

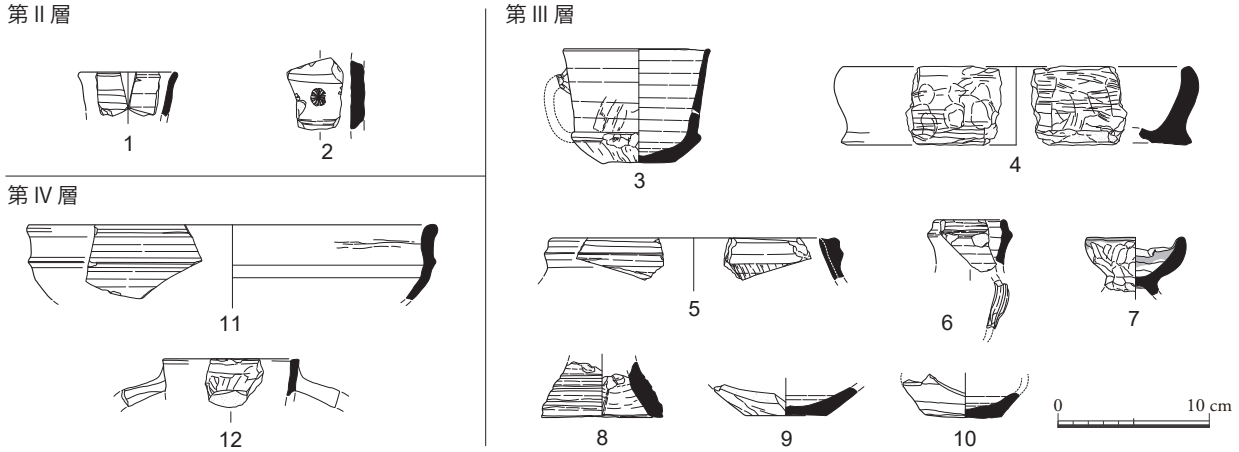


図５　第２シャフリスタン地区 2015 年調査区出土土器（文化層別）

図５　土器属性表

図版番号	文化層	出土位置	型式	口径（底部径）	土器群	質感	色調	混和物	器面装飾
5: 1	Ⅱ	AreaD_-0.25-0.5m	有頸壺	66	1a	精良	内面：2.5YR6/8 外面：2.5YR6/6 断面：2.5YR7/6	0.5 mm径の灰色粒少量、0.5 mm未満径の石英極少量	–
5: 2	Ⅱ	AreaA_-0.25-0.5m	花形印影付き胴部片	–	1a	普通	内面：2.5YR7/8 外面：2.5YR7/8 断面2.5YR7/8	0.5-1.0 mm径の長石やや多量、0.5 mm未満径の石英少量	–
5: 3	Ⅲ	SI1508	環状把手付きカップ	97	1c	普通～精良	内面：2.5YR6/6 外面：2.5YR7/6 断面：5YR5/4	0.5-1.0 mm径の灰色・黒色粒やや多量、0.5-1.0 mm径の長石少量	–
5: 4	Ⅲ	Area C_-0.85-0.75m	盤状容器	大型？	6	粗	内面：5YR6/6 外面：10YR7/3 断面：5YR6/6	1.5-6.0 mm径の灰色・黒色粒やや多量、1.0 mm径の長石少量、0.5 mm 未満径の石英少量	内外面にセルフ・ウォッシュ（10YR7/3）
5: 5	Ⅲ	SX1510	中型短頸壺	186	2	精良	内面：2.5YR6/6 外面：5YR6/6 断面：5YR5/4	5-7 mm長の切藁数片、0.5 mm未満径の雲母やや多量、0.5-2.0 mm径の灰色粒・長石少量	内外面に暗白色ウォッシュ（7.5YR7/4）
5: 6	Ⅲ	SX1510	水差し	48	2	精良	内面：7.5YR5/4 外面：7.5YR5/4 断面：7.5YR6/3	0.5 mm未満径の灰色粒数片	内外面に白色ウォッシュ（内面：5Y7/1；外面：5Y8/1）
5: 7	Ⅲ	SI1508	台付きランプ	64	6	粗	内面：5YR6/6 外面：7.5YR6/4 断面：7.5YR5/4	1.0 mm径の長石・灰色粒多量、0.5 mm径の石英少量	–
5: 8	Ⅲ	SI1508	台状底部	80	1d	精良	内面：2.5YR6/6 外面：2.5YR6/6 断面：2.5YR6/6	1.0 mm径の灰色粒極めて少量、0.5 mm未満径の石英少量	外面に白色ウォッシュ（10YR8/3）
5: 9	Ⅲ	SX1503	平底底部	74	1d	精良	内面：5YR6/6 外面：5YR6/6 断面：5YR6/6	1.0 mm径の長石やや多量、0.5 mm未満径の石英やや多量	外面に白色ウォッシュ（2.5Y8/2）
5: 10	Ⅲ	AreaD_-0.7m	平底底部	50	1a	普通～精良	内面：5YR7/6 外面：5YR7/6 断面：2.5YR7/8	0.5-1.0 mm径の長石及び赤色・黒色粒やや多量、0.5 mm未満径の石英少量	外面にセルフ・ウォッシュ（7.5YR8/4）
5: 11	Ⅳ		中型鉢	–	1b	普通	内面：2.5YR7/8 外面：2.5YR7/8 断面：2.5YR7/9	0.5-1.0 mm径の長石やや多量、0.5 mm未満径の石英少量	外面に白色ウォッシュ
5: 12	Ⅳ	SA1501	環状把手付き水差し	90	1b	普通	内面：5YR6/6 外面：7.5YR5/4 断面：5YR6/6	0.5-1.0 mm径の灰色粒・長石やや多量、0.5 mm未満径の石英少量	外面に白色ウォッシュ（10YR8/3）

１・２は、第Ⅱ層出土土器である。１は、1a 群に属する小型有頸壺の口縁部片である。胎土は精良であり、外面にロクロ成形時の回転痕が見られる。復元口径 66㎜。２は、1a 群に属する印花文を伴う胴部片である。印花文は焼成前に押捺されたもので、８枚の花弁が放射状に並ぶ。この印花文の下には、１条の幅の狭い水平沈線がややカーヴを描いて施される。破片の内外面にはロクロ成形時の回転痕が見られる。元来の器種は復元できないが、水平沈線がやや彎曲することに鑑みて、この破片は壺形土器の肩部付近を構成していた可能性がある。また、類似した印花文は、近傍のケン・ブルン遺跡で採集されたカラハン朝時代及びポスト・カラハン朝時代の土器にも見られる（山内・アマンバエヴァ編 2016：図 5. 14: 26, 5. 15: 7）。

３～10は、第Ⅲ層出土土器である。９を除く全てが調査区東側の住居址内（SI1508・SX1509・SX1510）から出土し、９のみは調査区西端で検出した大土坑（SX1503）から出土した。３は、1c 群に属する環状把手付きのカップである。把手はその

大部分が欠損しているものの、今回調査で出土した土器のうち、口唇部から底部まで形状が復元できた唯一の資料である。口縁部から胴部はやや外側に傾斜して真っ直ぐ立ち上がり、口唇は丸く収まる。胴部下半部と底部の境界部分外面は顕著に突出するが、内面はなだらかである。胴部外面下半部には、部分的に右上がりの連続するナデ痕が見られる。また、底部外面には左上がりのケズリが連続して認められる。内外面全体にロクロによる回転痕が認められるとともに、底面に糸切り痕が見られるため、ロクロを用いて成形されたと考えられる。復元口径97㎜。なお、アク・ベシム遺跡第１シャフリスタン地区からも、カラハン朝時代に属する類品が出土している（山内・アマンバエヴァ編 2016：図 4. 27：18）。４は、６群に属する盤状容器である。胴部から口縁部にかけてやや内彎する。また、底部外面は顕著に突出する。粗製土器であり、内外面には指頭痕が無数に残ることから、手捏ねによる成形と考えられる。なお、内外面ともに、指頭痕の上からは横ナデが施される。口径は復元できなかったが、大型と考えられる（図上では仮に復元的に示した）。５は、２群に属する胎土精良の中型短頸壺である。頸部はやや内側に傾斜する。口縁部は肥厚のうえ隆帯様に水平の稜２条が突出し、口唇には凹線が廻る。内外面ともに回転ナデが認められるが、内面下半部には左上がりの連続するナデが施されている。その形態に鑑みて、おそらく貯蔵用と思われる。復元口径186㎜。６は、２群に属する水差しの口縁部片である。胎土は精良である。口縁部上端は内側に屈曲し、外面には稜線が廻る。内面には回転ナデ、外面には白色ウォッシュ[1)]が施された後に回転ナデが施される。部分的な残存ではあるが、口縁が円環を呈さずに歪むため、おそらく片口が取り付いていたと思われる。復元最小口径48㎜。なお、このような特徴的な口縁部を有する水差しは、アク・ベシム遺跡第１シャフリスタン地区のカラハン朝時代の出土土器中にも認められる（山内・アマンバエヴァ編 2016：図 4. 28: 15, 16）。７は、６群に属する手捏ねの台付きランプと思われる。ランプ部分は小型のカップ状を呈しており、口縁部は緩やかなカーヴを描いてやや外側に開き、口唇部は丸く収まる。台部分はほとんど欠損しているが、元来はやや外反する円錐形を呈していたと思われる。ランプ部分及び台部分共に、内外面に斜め及び縦ナデが連続して施される。また、口唇部と内面上半にかけて煤が付着する。復元口径64㎜。８は、1d 群に属する台状底部片である。胎土は精良である。底面にかけてやや傾斜の急なハの字に開き、端部はケズリが施されて平坦である。外面には幅の狭い４本の水平沈線が施された後、白色ウォッシュの上から回転ナデ調整により仕上げられる。内面には、白色ウォッシュの上から横ケズリが施される。底部径 80㎜。９・10は平底底部片である。９は、1d 群に属し、胎土は精良である。やや凹面を呈する平底を有し、器壁は斜めに真っ直ぐ立ち上がる。外面には、白色ウォッシュの上から左上がりのケズリが施される。内面にはロクロ成形時の回転痕が見られる。これに加えて、底面に糸切り痕が残ることから、ロクロにより成形されたと考えられる。底部径 74㎜。10は、1a 群に属する。９とは異なり、凸面を呈する底面を有する。器壁は外傾するが、やや内彎気味に立ち上がる。外面には、セルフ・ウォッシュ[2)]の上から横ナデが施される。内面には、ロクロ成形時の回転ナデ痕が見られる。底面に糸切り痕は見られないが、やはり成形時にはロクロが用いられたと考えられるだろう。底部径50㎜。9・10は、器壁の立ち上がりと内面への調整痕があまり見られないことに鑑みて、いずれも壺形土器の底部と考えられる。

11・12は、第Ⅳ層出土土器である。11は、Ib 群に属する中型の鉢である。内城壁（SA1501）西側に広がる硬化面上の瓦集中 Group A の直下から見つかった（城倉他 2016：図12）。胴部下半から緩やかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反、端部にかけてやや肥厚して丸く収まる。胴部中程には、水平隆帯が突出する。外面には、白色ウォッシュの上から連続する回転ナデが施される。内面には、横ナデの僅かな痕跡が見られるのみである。復元口径 272㎜。なお、クズラソフによる第Ⅱ調査区第１・２文化層やセミレチエ地方の５～８世紀に属する遺跡から同様の鉢が見つかっているようであり（Kyzlasov 2010: Fig. 47: 54, 65; Бернштам 1950: Табл. 48: 10）、さらには、ソグディアナのペンジケント遺跡コンプレックス VI（7 世紀）からも類例が認められる（Маршак 2012: Ил.125）（本稿第５節にて詳述）。12は、1b 群に属する環状把手付き有頸壺である。内城壁（SA1501）西辺の断割調査時に出土した。口縁部はやや外傾して真っ直ぐ立ち上がり、端部は平坦面をなす。環状把手は、口縁部直下にやや下向き

に取り付くのが特徴である。外面には、白色ウォッシュの上からナデが施される。口縁部では横ナデが、環状把手部では縦ナデが連続的に施されている。復元口径 90㎜。

３．まとめ：各文化層の特徴と推定時期について

以上の分析により、第２シャフリスタン地区2015年調査区から出土した土器の特徴が明らかになった。

第Ⅱ・Ⅲ層と第Ⅳ層は、出土土器の数量及び土器群･型式の種類から､相互に異質であることがわかった。第Ⅱ・Ⅲ層出土土器群は全体の大半を占めており、１群を中心としているが、調理用と思しき６群等も含まれている。また、特に第Ⅲ層からは、貯蔵壺や水差し、また、粗製盤が出土しており、調理等の日常的活動が営まれたことが推測される。こうした証拠は、内城壁（SA1501）東側で、住居に伴うと考えられる各種遺構が検出されたことと矛盾しない。

これに対して、第Ⅳ層出土土器は僅か４点と少なく、出土器種も極めて限定的であった。第Ⅳ層にあたる内城壁（SA1501）及びその西側では大量の瓦塼類が出土しており、その「官衙」的性格が推測されるが、出土土器の傾向もこうした性格を裏付けると考えられるだろう。したがって、第Ⅱ・Ⅲ層と第Ⅳ層では、遺跡利用の性格が全く異なることが改めて明らかになった。

このような文化層別の性格差は、一体何を示しているのだろうか。２つの解釈可能性、すなわち、機能差と時期差が考えられる。第Ⅲ層と第Ⅳ層の前後関係は、西端の大土坑（SX1503）を第Ⅲ層と看做して、これが第Ⅳ層の硬化面を壊していることを根拠としており、内城壁（SA1501）の東西の遺構の直接的な先後関係はこれまで明らかにされていない。このため､検出遺構の違いを､内城壁（SA1501）の内（西側）外（東側）の機能差に還元することも可能であった。

しかしながら、出土土器の分析から、上記２文化層は異なる時期に利用された蓋然性が高いことが示された。すなわち、第Ⅲ層出土土器は、第１シャフリスタン地区出土土器に複数の類品が見られ、10～11世紀頃のカラハン朝時代に利用されたと考えられる。一方、第Ⅳ層からは、５～８世紀に位置づけられる中型鉢や、セミレチエ地方ないし中央アジアでは稀な還元焔焼成の４群の土器片が出土している。これらの土器の由来についてはさらなる検証が必要であるものの、それぞれソグド系・中国系と推測される。したがって、第Ⅳ層がカラハン朝時代以前の時期に利用されていたことが示唆されるのである。

Ⅳ．第１シャフリスタン地区出土の土器

第２シャフリスタン地区 2015 年調査区より出土した土器群は、その数量が極めて限られていたにもかかわらず、第２シャフリスタンの利用時期について多くの示唆を与えてくれた。特に、第Ⅳ層出土土器は、第２シャフリスタンの利用が８世紀以前に遡る可能性を示唆している。これはまさしく、安西副都護であった王方翼により砕葉鎮の城壁が築かれたとされる時期（679 年）に符合しており（『旧唐書』巻一八五上「良吏伝上　王方翼」)、きわめて興味深い。しかしながら、第Ⅳ層出土土器の数量が極めて限定的であったこともさることながら、その上層の第Ⅱ・Ⅲ層のより精確な時期が同発掘調査の成果だけでは確定しきれないという状況は、第Ⅳ層の編年的・文化的位置付けに際して影を落としている。そこで本節では、前節において検討した第２シャフリスタン地区出土土器群の編年的・文化的位置付けをより明確にするために、2015年夏季発掘調査時に第１シャフリスタン地区から出土した土器群を分析対象とし､第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅱ・Ⅲ層出土土器と比較することにした。幸いなことに、第１シャフリスタン地区では５／６～11世紀までの厚い文化層が認められており、精密な編年研究に最適である。また2016年からは、帝京大学による発掘調査が継続的に行われており、７～11世紀頃の土器型式の変遷が明らかになりつつある（山内他 2019：66-177；櫛原 2020)。こうした成果をも参照して、第２シャフリスタン地区2015年調査区出土土器の位置づけを以下で明らかにしておきたい。

１．比較分析の対象資料

第１シャフリスタンは５～６世紀のソグド人の進出によるものとされるが、これまでの調査では最下層の様相は部分的にしか明らかにされていない（クズラソフによる第Ⅱ調査区トレンチ１）（cf. Kyzlasov 2010)。同地区での発掘調査は以前より断

続的に行われてきたが、今日継続している発掘調査は2012～2014年の東京文化財研究所による国際研修事業を端緒としている（山内・アマンバエヴァ編 2016）。2015年６～７月には、科学研究費補助金「基盤研究Ｂ（海外学術）」（代表：山内和也）により学術調査が本格的に開始された。

日本隊による第１シャフリスタンにおける調査区は元来、東西 30 m、南北 20 m の規模を測り、南城門と考えられる南城壁の凹部から北に約 100 m の地点に、南北に延びる目抜き通りを横断するかたちで配置された。発掘調査は、2012～2015年までは東京文化財研究所により、2016年以降は帝京大学により下層に向かって継続して行われている。2012～2014年の東京文化財研究所による研修発掘の結果、表土直下の最上層（第Ｉ層）上層からは複数の住居址（ユニット）が検出され（図６）、出土土器の型式的特徴に鑑みて、当該層はカラハン朝時代に比定された。また、2012 年９月に第Ｉ層上層の街路跡と住居址から採集された木炭片５点の ^{14}C 年代は10世紀頃（カラハン朝時代）を示しており、上記の見解と一致する（山内・アマンバエヴァ編 2016）。

本章で分析対象とするのは、2015年夏季に東京文化財研究所が実施した発掘調査において出土した土器群である。同発掘調査では、当該地区の第Ｉ層下層の様相が明らかになった。2012～2014年の発掘調査により、第Ｉ層では複数のユニットが検出された（山内・アマンバエヴァ編 2016：図 4. 9）が、2015年夏季発掘調査ではこれらのユニットの下層の状況を探るため、既に検出されていた上層の床面を掘削した。結果として、下層の床面及び床面構築時の整地を検出し、そこから多量の出土遺物が得られた。

本章では、ユニット１・４・５・６において、出土コンテクストが良好な170点の土器片を抽出し、土器群及び器種・型式について分析を行う[3)]。

２．第１シャフリスタン地区2015年発掘調査出土土器群と出土傾向

前節において、調整技法や胎土の特徴に基づき、第２シャフリスタン地区2015年調査区出土土器群を９つの土器群に分類した（城倉他 2017）。第１シャフリスタン地区出土土器についても同様の基準に従い分類を実施したが、この分類項目に収まらない土

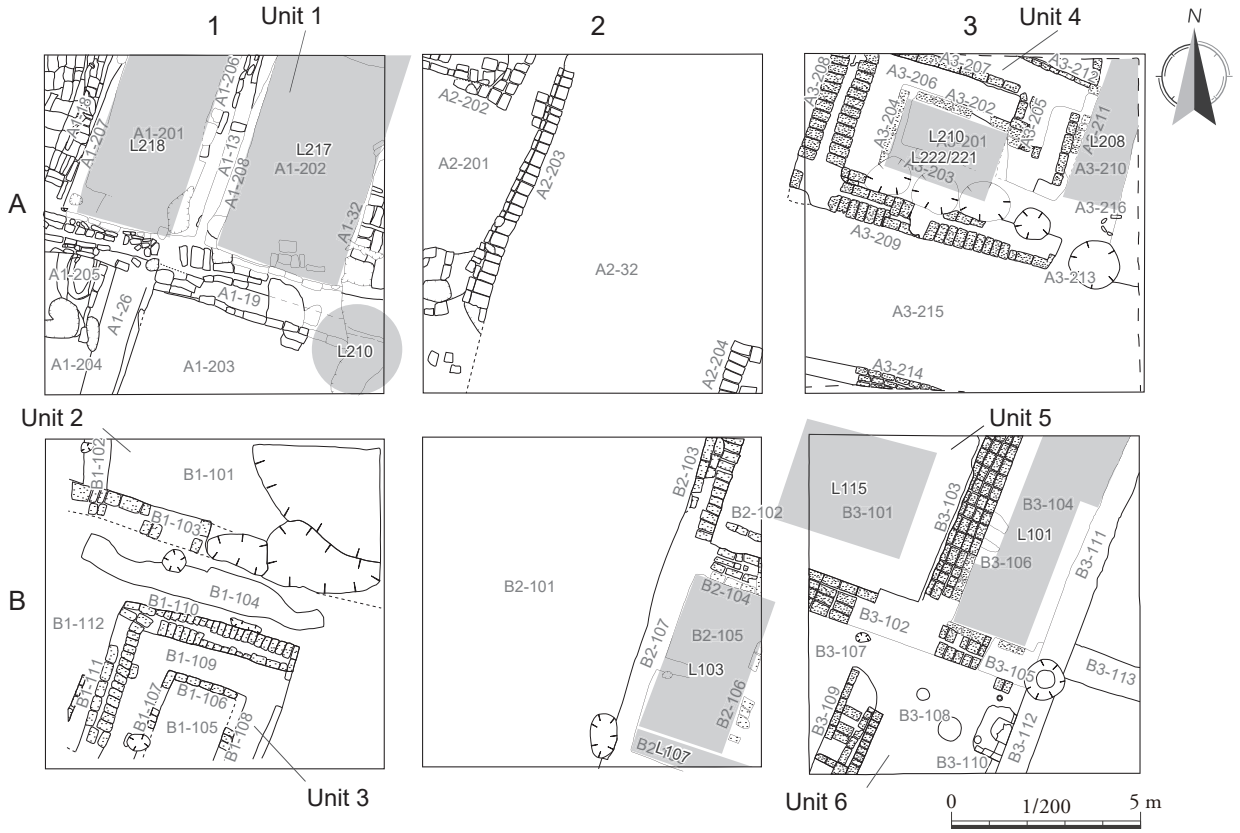


図６　2015 年第１シャフリスタン地区ユニット平面図（山内・アマンバエヴァ編 2016：図 4. 9 を改変）
※網掛け部分と番号は本稿における分析対象土器の出土地点・ローカス（上平面図の下層）を示す。

器片を少なからず確認した。そこで、上記の土器群に新たな分類項目を追加・設定し、その後、土器群全体の出土傾向について論じることにする。第１シャフリスタン地区出土土器の実見により、表１で既に示した土器群に新たに５つの土器群を追加する（表３）。

次に、土器群全体の出土傾向を、対象ユニット別・出土位置（Loci）別に見ていく（表４）。調査区北西部のユニット１の床面（L217･218）と土坑（L210）からは、計43点の土器片が出土した。これまでの基本的な傾向と同様、１群が大多数を占めている。特に、1a・b 群が19点と最も多く、1c・1d 群が10点とこれに次ぐ。また、調理用と考えられる６群が８点見られる。なお、出土土器の多くは床面検出の土坑（L210）から出土した。

調査区北東部のユニット４の床面（L208）からは計12点の土器片が出土した（図６）。いずれも１群であり、なかでも 1a・b 群が大多数（９点）を占める。また、ユニット４の床面（L210）構築時の整地と思しき堆積（L221・222）からは、計 66 点の土器片が出土した。このうち１群が50点を占めており、特に、1c 群は17点と最多である。この他、６群が13点出土している。

調査区南東部のユニット５の床面（L101・115）からは計26点の土器片が出土した（図６）。このユニットでもまた、１群の土器が大多数を占めており、特に 1a ～ c 群が目立つ。この他には顕著な傾向は見出せない。

同じく調査区南東部でユニット５南辺に隣接するユニット６の床面（L103・107）からは、計23点の土器片が出土した（図６）。このユニットでは、６群が 18 点と大多数を占めており、他にない傾向が見られた。しかし、建物への導線に鑑みて、北のユニット５と共に一連の建物として機能していた可能性が高く、上記の傾向は空間の機能差を表しているものと捉えられるだろう。

以上から、２つの点が明らかになった。まず、１群の存在が概して顕著であり、特に、1a ～ c 群の

表３　出土土器群の追加分類【2015年第１シャフリスタン地区】

土器群	出土点数	色調	質感	焼成方法	成形技法	器面調整の特徴	混和材	器種	その他
1e	4	橙色	普通～精良	酸化焔	ロクロ成形／手捏ね成形	外面にナデのみ	大きめの砂粒（多量）	–	
1f	4	橙色	普通～精良	酸化焔	ロクロ成形／手捏ね成形	外面にナデ／ケズリの後に白色ウォッシュ	大きめの砂粒（多量）	–	
10	3	赤橙色	普通	酸化焔	手捏ね成形	外面にナデ･ケズリ時折赤色スリップ	砂粒（少量	–	
11	3	鈍い橙色	粗製～普通	酸化焔	ロクロ成形	時折外面にケズリ･白色ウォッシュ	–	–	
12	3	鈍い灰橙色	粗製	酸化焔	手捏ね成形	外面にナデ･ケズリ	砂粒（多量）	–	鈍重な印象

表４　各土器群のユニット別出土傾向【2015年第１シャフリスタン地区】

グリッド	ユニット	出土位置	種別	土器群																
				1a	1b	1c	1d	1e	1f	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
A1	1	217	床面	2	1	1														
A1	1	218	床面	2	1	2	1			1				2						
A1	1	210	土坑	8	5	5	1	2	2					6					1	1
A3	4	208	床面	3	4		1													
A3	4	210	床面	1	1	1	1													
A3	4	222	整地	1	11	3	3							9				1	1	
A3	4	221	整地	9	5	14	4							4						1
B3	5	101	床面	2	1	2	1		1											
B3	5	115	床面	3	5	4	2	2						2				1		
B2	6	103	床面		1	1								9				1	1	1
B2	6	107	スーファ											9						
総計				31	35	33	14	4	3	1	0	0	0	41	0	0	0	3	3	3

出土が目立つということである。これは、シャフリスタン地区第Ⅰ層下層において、１群が基本的な土器群であることを示している。また、一部のユニットを除いて、６群が一定数認められた。ユニット４床面（L208・210）では６群は認められなかったが、ユニット４構築時の整地（L221・222）からはやはり６群が一定数出土したことに鑑みて[4]、ユニット４床面における６群の不在は機能差によるものと考えられる。したがって、６群の存在もまた、当該文化層を特徴づける土器群と言えるだろう。

３．器種別出土傾向

次に、土器の器種別に出土傾向を見ていく。ここでは、器種の全く不明な胴部片を除く161点を対象とする。なお､対象資料中数点の土器片については、土器群が未設定であった2015年夏に作成した実測図を分析対象に加えたため、土器群が不明である。以下の分析では、有意な傾向の把捉を容易にするために細かい型式設定は行わず､以下の簡易な器種（部位）分類を用いる。

鉢　口縁部周辺で最大径をとる。口径の方が器高よりも数値が大きい。

カップ　口径10㎝未満、器高15㎝未満の朝顔形を呈する薄手の精製土器。ロクロ成形。胴体下部から底部近くの外面に屈曲を有する。胴体下半に環状把手が１つ取り付く。

大型甕／壺　かなり厚手で、胎土が普通から粗製の大型土器。

壺　口径20㎝未満の小～中型土器。ロクロ成形。時折、一対の環状把手が肩部から胴部上半に取り付く。

調理用甕　粗製の無頸壺。外面は煤に覆われていることが多い。

水差し　口縁部に片口が付く、あるいは、肩部に長い注口が取り付く、胎土が普通から精製の細頸壺。ロクロ成形。口縁部から肩部にかけて、１ないし２つの環状把手が取り付くことが多い。

蓋　直径20～30㎝程度で、胎土がやや粗製の円盤。上面中央には高さ３㎝程度のつまみ状把手が取り付く。上面はナデにより調整され、刻文により装飾される。下面は未調整のものが多い。部分的に煤が付着する物がほとんどである。

上記の器種以外は、以下の部位に分類する。

環状把手片　由来が不明な環状把手をまとめた。

注口片　由来が不明な注口片をまとめた。

平底片　おそらく壺、水差し、調理用甕いずれかの底部片と思われる。

高台片　由来する器種が不明な底部片。

次に、上記器種の出土傾向を、上述の土器群と同様に対象ユニット及び出土位置（Loci）別に見ていく（表５）。ユニット１床面（L217・218）では、水差しが４点と最多であり、大型甕／壺が２点とこれに次ぐ。ユニット１土坑（L210）からは、明確な器種としては調理用甕が５点出土しており、顕著である。器種不明確な破片は、環状把手と平底片が多く出土しており、水差しの存在を示唆している。

表５　各器種のユニット別出土傾向【2015年第１シャフリスタン地区】

グリッド	ユニット	出土位置	種別	鉢	カップ	大型甕／壺	壺	水差し	調理用甕	蓋	環状把手片	注口片	平底片	高台片
A1	1	217	床面					2					1	
A1	1	218	床面		1	2		2	1				1	
A1	1	210	土坑	1				2	5	3	7		9	
A3	4	208	床面					2			4		2	
A3	4	210	床面		1						2		1	
A3	4	222	整地	4	2		6	1	4	3	2	1	5	1
A3	4	221	整地			1		5	4	1	4		18	1
B3	5	101	床面		1	1	1	1					4	
B3	5	115	床面		2	4	1	2	3		1	1	5	
B2	6	103	床面	1					8				4	
B2	6	107	スーファ						9					
総計				6	7	8	8	17	34	7	20	2	50	2

一方、鉢とカップは各１点しか見つかっていない。

ユニット４床面（L208・210）からは、僅かに３点の明確な器種（水差し２点とカップ１点）が認められた。器種不明な破片は、環状把手６点及び平底片３点が出土しており、水差しのさらなる存在を示唆している。ユニット４構築時の整地（L221・222）からは、全ての器種が認められた。とりわけ、調理用甕が９点と最も多く、壺と水差しが各６点認められる。また、器種不明な破片として、平底片が23点も認められることから、本来はより多くの壺類が存在した可能性も否定できない。なお、鉢とカップは合わせて６点のみ出土した。

ユニット５床面（L101・115）からは、大型甕／壺が多く認められた。また、器種不明な破片では平底片が９点出土しており、２点のみ出土が認められた壺は、実際にはより多かった可能性が示唆される。この他、カップが３点認められた点で、他のユニットとは異なる。南隣するユニット６（グリッドB2）床面（L103）及びスーファ（L107）では、調理用甕が圧倒的多数を占めている。これ以外の器種として、大型の鉢が１点出土した。先述のとおり、このユニットは隣接するユニット５と一連の建物を構成していたと認識できるため、両者を合わせて傾向を見る必要がある。

以上、ユニット別にやや異なる傾向は見られたものの、いくつかの共通する傾向を確認することができた。１つは、いずれのユニットでも大型甕／壺・壺・水差しが多数を占めていることである。また、これとは逆に、鉢とカップは常に少数しか認められず、鉢は大型あるいは中型に限られる。さらに、土器群の分析でも見たとおり、６群と一致する調理用甕は、常に一定数が認められた。こうした共通点は、当該期の器種組成の特徴を表しているものと思われる。

４．ユニット別出土土器

上記で示した出土土器のうち、形態を復元できたか特徴的な土器を図７に示す。以下では、出土土器の型式的特徴に着目して、ユニット別に詳述する。

１・２は、ユニット１出土土器である。１は1a群に属する大型甕の口縁部片である。器壁は分厚いがロクロ成形であり、胎土は普通から精良である。口縁部は外反し肥厚する。また、口縁外面下部には隆帯が廻る。頸部外面にはロクロナデの上から右上がりのナデが、また、その下部には左上がりの磨研が連続して施されている。内面は、ロクロナデの後に研磨が施されたようで、僅かな光沢を放つ。復元口径200～220㎜。２は６群に属する調理用甕である。粘土紐により成形され、胎土は粗製から普通を呈し、外面には煤痕が見られる。口縁部は強く内彎したのち上方に僅かに屈曲する。やや強く張り出した肩部には、顕著な押捺を伴う太めの隆帯が貼付されている。内外面共に、やや粗い横ナデ施される。復元口径176～192㎜。

３～７はユニット４構築時の整地からの出土土器である。３は６群に属する粗製の中型鉢である。粘土紐の積み上げにより成形される。口縁部はやや内彎し、口縁端部は、やや丸みを帯びた平坦面を成す。口縁部外面には横ナデが施される。胴部外面は部分的に荒れてはいるものの、左上がり及び横方向のナデの痕跡が認められる。一方、内面には指頭痕が多数残る。復元口径236㎜。４は1a群に属する環状把手付き短頸壺である。ロクロ成形であるが、胴部上半で接合痕が認められることから、上下部分を別々に成形後、最終的に一体に接合したと考えられる。口縁部はやや強く外反し、断面三角形を呈する。頸部から肩部にかけて環状把手が取り付く。破片資料のため現況では把手は１つしか残存していないが、元来は対称位置に一対が取り付けられていたと思われる。なお、把手上面にはボタン状円板が装飾的意匠として貼付される。頸部と肩部の境界付近の外面には、３条の水平沈線が平行に廻る。外面上半にはセルフ・スリップの後にロクロナデが、また、内面上半にはロクロナデの痕跡が認められる。復元口径178㎜。５は1d群の柱状注口付き水差しである。ロクロ成形で、胎土は普通から精良である。口縁部は頸部からやや外反気味に直立し、端部が内側に僅かに屈曲する。口縁上面は平坦面をなす。注口は肩部に取り付けられており、頸部側上部が口縁部下に取り付くため、あたかも環状把手のような外観を呈する。注口端部は欠損しているが、元来は片口状に突出していたと思われる。内外面共にロクロナデが施されるが、肩部外面にはその上から横方向の磨研が施される。また、肩部には、同心円と三角形から成る帯状の刻文が廻っている。復元口径110㎜。６は12群の高台片である。胎土は粗く、器壁も厚い。高台端部は肥厚し、外面に連続押捺による装飾が施される。外面には横ナデ及び横ケズリが施され、内面（底面）には不規則なナデが見られる。復元底径

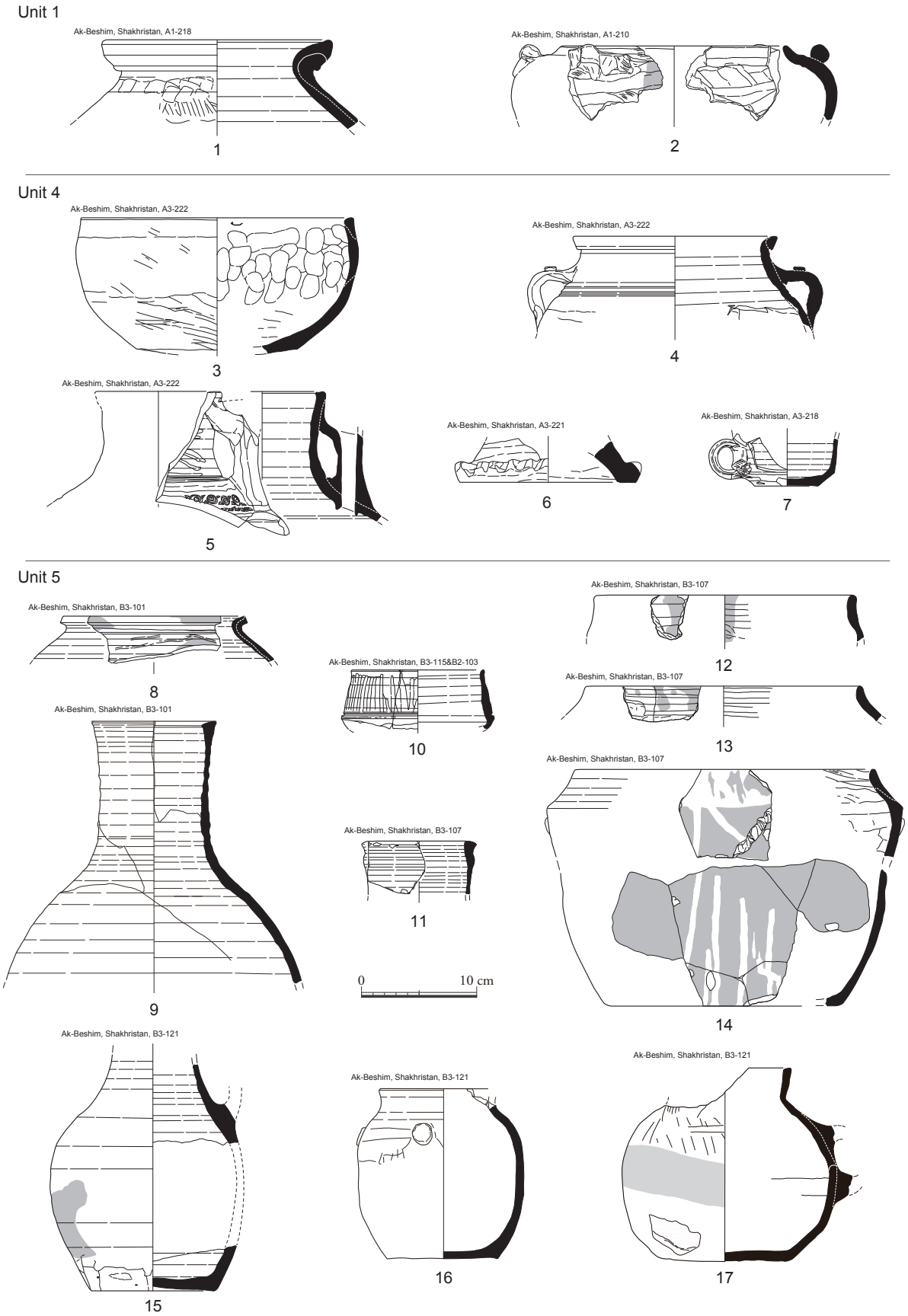


図７　2015年第１シャフリスタン地区ユニット別出土土器

図７　土器属性表

図版番号	出土位置	器 種	口 径（底部径）	土器群	質 感	色 調	混和物	器面装飾
3: 1	A1-218	大型甕	200-220	1a	普通～精良	内面:2.5YR6/8 外面:2.5YR6/6 断面:2.5YR6/8	0.5-1.0 mm径の灰色粒（砂粒）少量、0.5-1.0 mm径の長石少量	-
3: 2	A1-210	調理用甕	176-192	6	粗～普通	内面:5YR7/4 外面:2.5YR7/4 断面:5YR6/4	1.0-3.0 mm径の砂粒多量、1.0-3.0 mm径の長石少量	外面に白色ウォッシュ（10YR8/3）
3: 3	A3-222	中型鉢	236	6	粗	内面:2.5YR6/6 外面:2.5YR6/6 断面:2.5YR6/6&7.5YR7/4	1.0-3.0 mm径の砂粒極めて多量、1.0 mm径の長石／方解石多量、小径雲母少量	口縁部が白色（セルフ・スリップか？、10YR8/3）
3: 4	A3-222	環状把手付き短頸壺	178	1a	普通～精良	内面:2.5YR6/8 外面:5YR6/6 断面:2.5YR7/8	0.5 mm未満径の方解石及び黒色粒少量、1.0 mm径の白色粒（長石）及び黒色粒少量	胴部上半外面にセルフ・スリップ（5YR7/6）
3: 5	A3-222	柱状注口付き水指し	110	1d	普通～精良	内面:5YR7/6 外面:2.5YR6/6 断面:2.5YR6/6	0.5-1.0 mm径の長石少量、0.5-1.0 mm径の砂粒極少量	外面に白色ウォッシュ（7.5YR7/3）、肩部外面に押捺装飾帯
3: 6	A3-221	高台	156	12	粗	内面:7.5YR6/3 外面:7.5YR7/4 断面:10YR4/1	1.0-2.0 mm径の砂粒やや多量	底部外面に連続的な押捺を伴う。底部に白色ウォッシュ（10YR7/2）？
3: 7	A3-218	カップ	56	1d	精良	内面:5YR6/6 外面:5YR6/6 断面:5YR6/6	0.5 mm未満径の長石及び小径雲母極少量	外面に白色ウォッシュ（10YR8/3）
3: 8	B3-101	短頸壺	162	1a	精良	内面:7.5YR7/4 外面:7.5YR7/6 断面:5YR6/6	0.5-1.0 mm径の褐色（長石？）及び黒色粒少量、0.5-1.0 mm径の雲母極少量	-
3: 9	B3-101	水差し	108	1a	普通	内面:2.5YR6/6 外面:2.5YR6/6 断面:10R5/6	0.5-1.5 mm径の灰色粒多量、0.5-2.0 mm径の白色粒（方解石）少量	-
3: 10	B3-115, B2-103	カップ	116	1d	精良	内面:2.5YR6/8 外面:2.5YR6/8 断面:2.5YR5/6	1.0 mm径の砂粒多量、1.0 mm未満径の長石少量、1.0 mm未満径の雲母極少量	外面に白色ウォッシュ（10YR8/3-10YR7/3）
3: 11	B3-107	水差し	100	1b	精良	内面:2.5YR6/8 外面:2.5YR6/6 断面:2.5YR6/4	0.5-1.0 mm径の灰色粒少量、雲母少量	外面に白色ウォッシュ（7.5YR7/4）
3: 12	B3-107	調理用甕	204	6	粗	内面:5YR6/6 外面:2.5YR8/2～2.5Y7/2 断面:2.5YR5/6	0.5 mm径の灰色粒多量	-
3: 13	B3-107	調理用甕	238	6	普通	内面:5YR6/4 外面:10YR7/2 断面:2.5Y6/1	0.5-1.0 mm径の灰色粒多量、0.5-5.5 mm径の白色粒少量、雲母及び石英数片	-
3: 14	B3-107	調理用甕	260	6	普通	内面:2.5YR6/8 外面:2.5YR6/8 断面:2.5YR5/6	1 mm径の方解石多量、1 mm径の灰色粒少量、1 mm径の雲母及び石英数片	外面に白色線文（2.5Y8/3）
3: 15	B3-121	水差し	107（底部径）	1d(?)	普通～精良	内面:2.5YR5/8 外面:2.5YR6/6 断面:2.5YR6/8	0.5-1.0 mm径の長石（？）少量、0.5 mm未満径の小径雲母極少量	胴部上半外面に部分的に白色スリップ（10YR8/4）？
3: 16	B3-121	調理用甕	112	6	粗～普通	内面:2.5YR5/8 外面:2.5YR6/6 断面:2.5YR6/9	0.5-1.0 mm径の黒色及び灰色粒が極めて多量	-
3: 17	B3-121	調理用甕	116	6	粗～普通	内面:5YR7/4 外面:5YR7/4 断面:7.5YR5/4	0.5-1.0 mm径の白色粒（方解石）多量、0.5-1.0 mm径の灰色粒少量	-

156㎜。７は1d群のカップである。この資料は、ユニット４南の東西街路の整地より出土したが、ユニット４の整地と同時期に整備されたと解釈し、ここに記載する。ロクロ成形であり、胎土は精良である。口縁部は欠損しており、環状把手が１つ取り付いた胴部から底部の破片資料である。内外両面にロクロナデが見られ、底部外面にはケズリが施される。また底部内面（見込み部分）には煤痕が残る。底径56㎜。

８～10はユニット５出土土器である。８は1a群の短頸壺である。ロクロ成形で、胎土は精良である。口縁部は外反し、端部はやや凹面を呈して斜めに面取りされる。内外面にはロクロナデが施される。外面には部分的に煤痕が残る。復元口径162㎜。９はおそらく1a群のやや大型の水差しである。ロクロ成形で、胎土は普通である。口縁部はほぼ直立し、口縁端部は肥厚のうえやや内傾して面取りされる。内外面にはロクロナデが施される。復元口径108㎜。10は1d群のカップである。ロクロ成形で、胎土は精良である。口縁部はやや内傾して伸び、口縁端部近くでわずかに外反して丸く収まる。胴部は顕著に屈曲し、屈曲部直上には水平沈線が１条廻る。内外面にはロクロナデが施され、口縁部外面には白色ウォッシュ塗布後に縦方向の磨研が連続的に施される。復元口径116㎜。

11～14はユニット６床面出土土器である。11はおそらく1b群の水差しの口縁部片である。ロクロ成形で、胎土は精良である。内外面共にロクロナデが施される。外面には白色ウォッシュが塗布される。復元口径100㎜。12～14は６群の調理用甕である。いずれも粘土紐の積み上げによる成形後に回転台により整形されており、胎土は粗製から普通である。肩部が屈曲し、口縁部は内傾してから上方に彎曲する。内外面には横ナデが施される。外面には煤痕が付着するが、12では内面にも煤痕が見られる。14には、肩部下の外面に押捺を伴う斜行隆帯が貼付

されるが、こうした装飾は当該文化層の調理用甕に一般的である。なお、14の外面には、縦方向の白色線文がいくつか見られる。復元口径は、12が204㎜、13が238㎜、14が260㎜である。

15～17はユニット６の埋納遺構出土土器である。15はおそらく1d群の水差しである。ロクロ成形で、胎土は普通から精良である。口縁部は欠損しているが、おそらくは長い頸部が直立していたと思われる。肩部には環状把手の痕跡が１ヶ所のみ認められる。内外面にはロクロナデを施し、外面下半には煤痕が一部残る。底部径107㎜。16・17はおそらく６群の調理用甕であり、ほぼ完形で出土した。粘土紐と回転台を併用して成形されたと思われ、胎土は粗製から普通である。16では、口縁部から頸部にかけての外面に横ナデが施されており、内面上半及び外面下半に煤痕が見られる。口径112㎜。17では、外面にやや不規則な斜行及び横ナデが施され、口縁部と胴部外面に煤痕が残る。復元口径116㎜。

５．第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅱ・Ⅲ層出土土器との比較

第１シャフリスタン地区第Ⅰ層下層のユニット床面・構築時整地から出土した土器の分析により、以下の２つの傾向が明らかになった。まず、土器群の分析から、１群、なかでも1a～c群が多くを占めるということである。また、常に６群が一定数存在するということも看過することができない傾向であった。さらに、器種に着目した場合、鉢がほとんど認められず、調理用甕と水差しが多数を占めるという顕著な傾向も看取された。検出したユニットがいずれも住居として利用されていたと考えられることから、こうした傾向はカラハン朝時代の日常生活を反映していると捉えられるだろう。以下では、これらの分析結果を、第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅱ・Ⅲ層出土土器の傾向と比較する。

前述のとおり、第２シャフリスタン地区2015年調査区では、第Ⅱ層から24点、第Ⅲ層から35点の土器が出土しており、定量分析に決して耐えうる数量ではない。しかし、前者では1a群が、後者では造りがより丁寧なIc・d群が最多数を占めることは明らかであり、また、両層共に各４点の６群を含んでいた（表２）。したがって、1a～c群が最多数認められ、６群が一定数存在した第１シャフリスタン地区第Ⅰ層下層と傾向はほぼ一致している。ただし、第１シャフリスタン地区第Ⅰ層下層では、最も丁寧な造りの1d群が最も少なく、また、1d群が最も多く出土したのがユニット４構築時の整地土層であることを考慮して、当該文化層を第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に位置付けることもできるだろう。なお、第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅱ・Ⅲ層で見られた２～５・７～９群は、第１シャフリスタン地区第Ⅰ層下層からは一切認められない。

次に、器種の出土傾向と個別型式を比較する。前節では、第２シャフリスタン地区2015年調査区出土土器の数量の制約から、器種の出土傾向に関する定量分析は行なっていない。しかし、鉢形は皆無、カップがおそらく２点であり、その他は壺・甕、水差し、調理用甕によりほとんど占められるようである。こうした傾向は、第１シャフリスタン地区第Ⅰ層下層とほぼ一致すると言える。それでは、土器型式を比較した場合はどうだろうか。実際のところ、第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅱ・Ⅲ層出土土器のうち図化に耐える資料があまりにも少ないため、個別の型式を比較することは難しい。比較的残りの良い水差しとカップ（図5: 1, 3, 6）に着目したが、水差しは口縁部の形態が異なっており（図7: 11）、カップは底部から屈曲部にかけての輪郭は類似するが、環状把手の形態が異なる（図7: 7）。したがって、型式学的観点から、第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅱ・Ⅲ層と第１シャフリスタン地区第Ⅰ層下層の出土土器は類似しているとは必ずしも言えない。

そこで、第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅲ層出土土器と第１シャフリスタン地区第Ⅰ層上層を比較すると、水差しの型式（口縁部の形態）に共通性が見られることがわかった（山内・アマンバエヴァ編2016：図4.28: 15, 16）。また、カップについても、型式が完全に一致するわけではないが、屈曲部の突出や環状把手の形態と取り付き方が類似している（山内・アマンバエヴァ編2016：図4.27: 18）。他の器種において型式学的比較ができないため明確な結論には至らないが、少なくとも第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅲ層出土土器は第１シャフリスタン地区第Ⅰ層上層と部分的に年代的併行関係にあると考えられる。

以上の比較分析結果を総合すると、第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅱ・Ⅲ層と第１シャフ

リスタン地区第Ⅰ層上・下層との関係に矛盾が生じることになる。すなわち、土器群を見た場合には第２シャフリスタン地区 2015 年調査区第Ⅱ・Ⅲ層の間に第１シャフリスタン地区第Ⅰ層下層が位置付けられ、また、型式に着目した場合には第２シャフリスタン地区 2015 年調査区第Ⅲ層に第１シャフリスタン地区第Ⅰ層上層が対応する可能性がある。この場合、例え比較できる資料数が限られているとしても、型式的類似は決して無視できない事実なので、土器群の推移について再考するのが妥当と思われる。土器群の推移は、常に大多数を占める１群を基準に考えることができ、より丁寧な造りの 1c・d 群が古い時期に多く、時期が下るにつれて比較的粗い造りの 1a・b 群が増加すると推定してきた（城倉他 2017）。確かに、この前提では、1a ～ c 類が多い第１シャフリスタン地区第Ⅰ層下層は 1c・d 群が多い第２シャフリスタン地区 2015 年調査区第Ⅲ層と 1a・b 群が多い同区第Ⅱ層の間に位置付けられることになる。しかし、第１シャフリスタン地区第Ⅰ層下層を詳細に見ると、1a・b 群に比べて 1c 群がわずかに少ない。また、これらに比べてはるかに少ないが、1d 群もわずかに存在している。こうした状況に鑑みると、1c 群がより古くから存在し、少し時間をおいて 1d 群が卓越してくると捉えることもできる。また、Ia・b 群は古い時期から造られていたが、Ic・d 群の卓越に伴い減少に転じ、Ic・d 群の衰退に伴って再び増加したと考えられる。上記の１群の技術的変遷に依れば、第１シャフリスタン地区第Ⅰ層下層は第２シャフリスタン地区 2015 年調査区第Ⅲ層よりも時間的に先行すると考えることができる。これにより、編年上の矛盾が解消されることになる。ここまで説明してきた層位の相互関係を上層から順にまとめておく。

①第２シャフリスタン地区 2015 年調査区第Ⅱ層
②第２シャフリスタン地区 2015 年調査区第Ⅲ層＝第１シャフリスタン地区第Ⅰ層上層
③第１シャフリスタン地区第Ⅰ層下層

上記の比較分析により、第２シャフリスタン地区 2015年調査区第Ⅱ・Ⅲ層がカラハン朝時代以降の文化層であることはほぼ明らかになったと言える。次は、第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅳ層の文化的・編年的位置付けについて、第２シャフリスタン地区における過去の発掘調査と周辺遺跡からの出土土器との比較分析からさらに固めていく必要がある。

Ⅴ．第２シャフリスタン地区2015年調査区文化層の年代再考

最後に、アク・ベシム遺跡の他地点と周辺遺跡からの層位的出土土器に基づいて、第２シャフリスタン地区 2015 年調査区における文化層（第Ⅱ～Ⅳ層）の時期をより精確に推定しておきたい。特に、第２シャフリスタンにおける「砕葉鎮」の存在を考古学の観点から検証するためには、第Ⅳ層の具体的な時期推定は必要である。確かに、同層からの出土資料数は極めて限られていたが、幸いなことに、胴部に屈曲を伴う特徴的な中型鉢が信頼性の高いコンテクストから出土しており、時期推定の良好な指標となるだろう。ただし、同型式がどの程度の時期幅を持って出土するのか、とりわけ年代の最下限は、第Ⅳ層の時期推定の精度に関わる大きな問題である。こうした問題の解決の糸口になりそうなのが、最近になって素案が提示されたアク・ベシム遺跡の土器編年である。

上述のとおり、近年、帝京大学によるアク・ベシム遺跡における継続的かつ精力的な発掘調査により出土した土器群の整理が進みつつあり、その型式変遷の様相が徐々に明らかにされつつある（山内他 2019：166-171；櫛原 2020）。新たに提示された編年表上で、第２シャフリスタン地区 2015 年調査区で確認した文化層の出土土器を対照すると、興味深いことが判明した。図化に堪える土器が僅少な第Ⅱ層は別にして、上層の第Ⅲ層出土土器の一部は、帝京大学による第２シャフリスタン地区 AKB-15 区３・７号ピット出土土器にのみかろうじて対応できる。図 5: 6 の水差し口縁部は、斜頸壺（帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所編 2020：Fig. 4. 61: 15-19-096）に断面形（内傾する口縁部端）・器面調整（白色ウォッシュ）・質感（精良な胎土）共に類似している。この他の土器は、帝京大学による発掘調査のいずれの地点からの出土土器に類似しない。近刊の報告書によれば、AKB-15 区 3・7 号ピットの時期は 10 世紀末～ 11 世紀初と見積もられており（帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史

文化遺産研究所編 2020：46-47)、この年代は本稿で扱った第１シャフリスタン地区第Ⅰ層上層の年代と一致する。したがって、第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅲ層は、AKB-15区３・７号ピット及び第１シャフリスタン地区第Ⅰ層上層と同時期である蓋然性が高いとはいえるだろう。しかしながら、帝京大学の調査において豊富な出土土器が得られているにもかかわらず、わずかに１点のみしか類例を確認できなかったのは誠に腑に落ちない。次に、第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅳ層の出土土器のうち図化できた２点（図5: 11, 12）を帝京大学による図化資料中に探すも、対応する型式が存在しないことがわかった。第１シャフリスタン地区においてのみ認められた、８世紀前半以前に遡ると考えられる２つのピット（AKB-13区1･4号ピット）から出土した土器群にも類例が認められないことから、第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅳ層の出土土器はこれ以前の所産と考えられ、後代には継続しない型式と推察される。

そこで、アク･ベシム遺跡の過去の調査に第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅳ層出土土器の比較対象を求めると、8世紀前半以前に位置付けられる遺構・文化層は各所で確認されていることがわかる。なかでも、第１シャフリスタン地区に設定された、クズラソフによるアク・ベシム遺跡第Ⅱ調査区中央のトレンチ１は、1）一般居住区の文化層堆積であること、また、2）厚い文化層堆積により時期変遷の連続性がある程度担保されていることから、比較対象としてより好ましい。この調査区では遺跡の地山に至る厚さ8.5 mもの土層堆積が得られており、このうち7.5 mで計４つの文化層が確認された（Kyzlasov 2010: 263)。出土土器の整理・分析は未だ十分ではないものの、幸いなことに、推定年代を伴う各文化層の土器レパートリーは簡略にまとめられている（Kyzlasov 2010: Figs. 47, 48)。出土コンテクストなどが十分に検討されていない土器群の取り扱いには注意を要するが、最下層である第１文化層及びその直上の第２文化層において、胴部に屈曲部を伴う中型鉢が明確に見られる（Kyzlasov 2010: Fig. 47: 54, 65)。なお、クズラソフによる第Ⅱ調査区第２文化層は７～８世紀に位置づけられているが、帝京大学による近年の調査成果に鑑みて（櫛原2020)[5]、屈曲胴部を有する中型鉢は８世紀まで下らないと判断できる。また、７～８世紀の年代が与えられているツィタデルの第６室からも同様の型式が出土している（Семенов 2002: Рис. 35)。これらの出土情報と併せて、近年の見解ではチュー渓谷へのソグド人の植民は６世紀が最初期と考えられていることから（cf. Горячева 2010: 35)、第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅳ層の利用時期は６～７世紀頃に比定しうるだろう。

最後に、第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅳ層の年代的位置づけをより明確にするために、周辺遺跡の状況を確認しておきたい。チュー渓谷ではこれまで、多くの都市遺跡が記録され、そのいくつかでは発掘調査が実施されてきた（Бернштам 1950; Кожемяко 1959; Горячева 2010)。その成果に基づいて、各遺跡の利用時期は既におおよそ判明している（表６；図８)。これらの都市遺跡のうち、アク・ベシム遺跡と同様に５～６世紀以降連続的に居住された遺跡は少ない。これまでのところ、西から、シス・トベ遺跡（古代名ヌジケト)、ソークルーク遺跡、クラスナヤ・レーチカ遺跡（古代名ナヴィカト）において６世紀以降の居住痕跡が知られており、チュー渓谷では最初期の都市と評価される。また、７世紀以降に居住され始めた８つの都市が認められるが、いずれも６世紀に成立した都市に比べてやや小規模である。このうち体系的な発掘調査が実施され、なおかつ、発掘調査の成果（出土土器の情報を含む）が報告されているのは、管見の限りではクラスナヤ・レーチカ遺跡のみである[6]。同遺跡はアク・ベシム遺跡と同様、ベルンシュタムらによる1939～1940年の発掘調査を皮切りに、今日まで様々な考古学調査の対象となってきた（コルチェンコ 2016：20-24)。７世紀以前の文化層にまで到達した発掘調査が数限られる中で、中枢部の城壁内では、1939～1940年にベルンシュタムの指導の下L. G. ロズィナ（Rozinoy）によるツィタデル周辺の発掘調査（第Ⅱ・Ⅳ調査区）が、また、K. M. バイパコフ（Baypakov）とV. D. ガリャチェワ（Garyacheva）らによるツィタデルの発掘調査（第Ⅳ調査区）が実施され、それぞれの調査者により下層が「ソグド」または６～７世紀に位置づけられている。ガリャチェワの論考では、おそらくこの調査区から出土した資料を含むと思われる７～９世紀の土器群が示されているが、この中には胴部に屈曲を伴う中型鉢が見られる（Горячева 2010: Рис. 24: 1, 3)。掲載資料の出土コンテクストが定かではないため年代的な保

表６　チュー渓谷における中世都市とその利用年代（Горячева 2010: Табл. 2 を参照）

No.	遺跡名	中枢部の規模（m）	居住年代（世紀）	古代都市名
1	アスパラ	186×160	10–14	アスパラ
2	カイーンディーン	–	**7–12**	
3	シス・トベ	550×500	**6–12**	ヌジケト
4	パルタフカ	300×190	9–12	
5	ベロボドスコエ・クレポスト	500×300	8–13	ハッランジュバン
6	アク・トベ・スレテンスコエ	240×190	9–12	
7	アク・トベ・トーレクスコエ	300×200	9–12	イーアガ
8	アク・トベ・ステルニーンスコエ	300×250	8–12	
9	アレクサンドロフカ	140×100	**7–12**	
10	ソークルーク	500×250	**6–14**	ジュルブ？
11	クルチェフカ	200×160	**7–12**	
12	グロズネン	700×300	9–12	サルィグ？
13	チュミシュ	340×170	**7–12**	
14	ノヴァ・ポクロフカ	320×300	**7–12**	キールミーライ
15	クラスナヤ・レーチカ	1500×800	**6–12**	ナヴィカト／新城
16	キスミチー	400×300	**7–13**	ブンジーカト
17	アク・ベシム	1500×1200	**6–11**	スイヤーブ／砕葉
18	ブラナ	600×580	10–14	バラサグン／クズ・オルドゥ
–	クズネチュナヤ・クレポスト	500×300	**7–11**	ジュルブ？
–	ミーリャンファン	480×480	**7–11**	サルィグ？
–	カラ・ジューガチュ	–	9–14	タルサケント

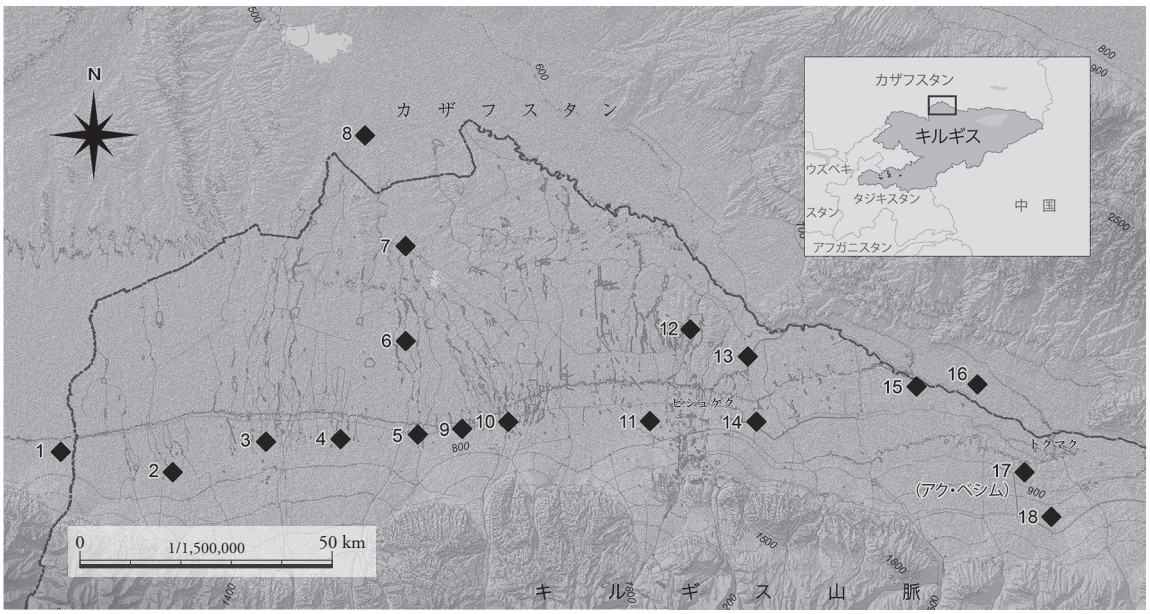


図８　チュー渓谷における中世都市遺跡の分布（番号は表４に対応）

証はないものの、アク・ベシム遺跡の第２シャフリスタン地区 2015 年調査区第Ⅳ層から出土した土器と同型式であることには間違いない。

なお、チュー渓谷の南東、ソグディアナの東方に位置するフェルガナ盆地においても、５～６世紀と思しき墓から出土した、胴部に屈曲を伴う中型鉢が散見される（Брыкина и Горобунова 1999: 110, Табл. 63: 6, 7, 9-11）。未だ定かではないものの、上記の事実は、胴部に屈曲を伴う中型鉢がソグド系の集団に特有の型式であった可能性を示唆している。したがって、今後はソグド人の故地であるソグディアナやその周辺地域にも視野を広げて、アク・ベシム遺跡の第２シャフリスタン地区2015年調査区第Ⅳ層から出土した土器の系譜を丁寧に探る必要があるだろう。

おわりに

以上、第２シャフリスタン地区 2015 年調査区第Ⅱ～Ⅳ層の年代的位置づけを精確にする目的で、1）第１シャフリスタン地区 2015 年調査区第Ⅰ層出土土器との定量・定質的比較、2）帝京大学によるアク・ベシム遺跡 AKB-13・15 区出土土器を用いた編年案への型式学的対応、また、3）アク・ベシム遺跡及び周辺遺跡･地域における出土土器との比較、を実施した。結果として、第２シャフリスタン地区 2015 年調査区第Ⅱ～Ⅳ層の年代は下記のとおりほぼ確定したのではないかと思う。

第Ⅱ層：11世紀中葉以降
第Ⅲ層：10世紀末～11世紀初頭
第Ⅳ層：６～７世紀

したがって、第Ⅳ層以後の 2015 年調査区周辺では、第Ⅲ層で第２シャフリスタンが再び利用されるようになるまで数世紀（おそらく８世紀初頭～ 10 世紀後半）の間隙を見なければならない。この空白期間には、かつてベルンシュタムが第２シャフリスタン地区の建築遺構・出土遺物をウイグルに帰した際に推定した９世紀という年代が収まっており、本年代観は同仮説を改めて否定するかたちとなった。上記の結果から、第２シャフリスタンでの建築活動は７世紀以前に始まったとする方が妥当であり、この年代は唐が「砕葉鎮」を築いた時期と正に一致する。

今後の課題として、第２シャフリスタン地区 2015 年調査区第Ⅳ層から出土した土器群の来歴を明らかにする必要がある。限られた資料数であるゆえに単体での型式学的比較に頼らざるを得ないが、胴部が屈曲する中型鉢等についてソグディアナや周辺地域から出土した資料中に同一・類似型式を認めることで、土器型式の時間的・空間的な広がりや地域差を理解し、ソグド人のチュー渓谷への進出過程について詳らかにできるかもしれない。他方、調査で出土した還元焔焼成土器は、東方の中国にその起源を求める必要があるだろう。こうした観点からさらに研究を進めるためには、第２シャフリスタン地区における出土土器の少なさを克服する必要がある。まずは、ベルンシュタムによって発掘された資料の再整理が必須である。そして、今後も継続する帝京大学の発掘調査によって６～７世紀代のまとまった土器群が発見され、私たちに新たな知見を与えてくれるよう大きな期待を寄せている。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、これまで調査研究等で以下の諸氏には大変お世話になった。この場をお借りして深く感謝申し上げたい。

赤司千恵、安倍雅史、バキット・アマンバエワ、稲葉　穣、岩井俊平、上杉彰紀、間舎裕生、櫛原功一、久米正吾、齊藤茂雄、オムルベク･ザナキエフ、アスカット・ジュマバエフ、城倉正祥、伝田郁夫、ナワビ矢麻、エレナ･ポポワ、望月秀和、森本　晋、山内和也、吉田　豊、ドミトリー・ルジャンスキー（50 音順、敬称略）

なお、長期に亘る調査研究は、周囲で支えてくれる無数の人々なしでは成功しえない。こうした諸氏に対してもまた、感謝の念に堪えない。

註

1）土器器面に薄く施した白色の化粧土を指す。このため、器面は淡い白系色を呈する場合が多い。
2）土器と同じ粘土を水で薄めて、化粧土として成形後の外面をコーティングする場合がある。本稿では、このコーティングが薄い場合には「セルフ・ウォッシュ」、厚い場合には「セルフ･スリップ」と記述し、区別している。
3）本節の目的に鑑み、床面あるいは床面から掘り込まれた同時期の土坑等から出土した土器片のみを対象とした。

４）ユニット４構築時の整地は、その直前の住居に由来する土壌（日干レンガの壁体・スーファ、カマド、その他床面堆積物等）を用いて成されたと考えられる。このため、構築時の整地はその上に貼られた床面に比べて一つ前の時期の遺物（土器）を含むと考えられるので、整地出土土器群は、厳密に言えば、床面出土土器群と並立して論じられるべきではない。とはいえ、たしかに精確な時間差が不明であるものの、整地出土土器の性質・型式に鑑みて、床面出土のものと同じ文化的コンテクストに属すると判断できることから、本節では両者の時間差がほとんど無いものと見做している。

５）櫛原により提示されたアク・ベシム遺跡出土土器の編年案をみると、７世紀後半～８世紀前半が「アク・ベシムⅤ段階」としてまとめられており、その根拠となる資料は第１シャフリスタン地区 AKB-13 区 2017-1・4 号ピットから出土している（櫛原 2020: 13）。しかし、この段階の土器群には、屈曲胴部を有する中型鉢は含まれていない。

６）コジェミャコにより、チュー渓谷内での考古学調査により得られた６～12世紀の土器は、時期別にその概要が記述されている（Кожемяко 1959: 24-64）。しかしながら、図示されている資料が出土した遺跡や遺構が判然としないことや、特定遺跡に焦点を絞った記述ではないため、この報告を比較分析に用いることはできない。

引用文献一覧

間舎裕生・久米正吾・山藤正敏 , 2016, 4. 2. 2. 出土遺物 . 山内和也 , アマンバエヴァ , B.（編）, キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究　アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡　― 2011～2014年度―．　独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター , キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所 , 36-52.

櫛原功一 , 2020, アク・ベシム遺跡の土器編年試案 . 帝京大学文化財研究所研究報告 , 19, 1-16.

ケンジェアフメト , N., 2009, スヤブ考古―唐代東西文化交流― . 窪田順平 , 承志 , 井上充幸（編）, イリ河歴史地理論集―ユーラシア深奥部からの眺め― . 松香堂 , 217-301.

コルチェンコ , V., 2016, 3. チュー川流域の中世の都城址 . 山内和也 , アマンバエヴァ , B.（編）, キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究　アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡　― 2011～2014年度―．　独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター , キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所 , 15-25.

城倉正祥 , 田畑幸嗣 , 山藤正敏 , 高橋　亘 , 山内和也 , アマンバエヴァ , B., 2020, キルギス共和国アク・ベシム遺跡の測量・GPR 調査―ラバト地区を中心に― . Waseda Rilas Journal, 8, 269-291.

城倉正祥 , 山藤正敏 , ナワビ矢麻 , 山内和也 , アマンバエヴァ , B., 2016, キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015 年秋期）調査 . Waseda Rilas Journal, 4, 43-71.

城倉正祥 , 山藤正敏 , ナワビ矢麻 , 伝田郁夫 , 山内和也 , アマンバエヴァ , B., 2017, キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015 年秋期）調査出土遺物の研究―土器・塼・杜懐宝碑編― . Waseda Rilas Journal, 5, 145-175.

城倉正祥 , 山藤正敏 , ナワビ矢麻 , 伝田郁夫 , 山内和也 , アマンバエヴァ , B., 2018, キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015 年秋期）調査出土遺物の研究―土器・瓦編―. Waseda Rilas Journal, 6, 205-257.

帝京大学文化財研究所 , キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所（編）, 2020, アク・ベシム（スイヤブ）2019. 帝京大学文化財研究所 , 185p.

帝京大学文化財研究所 , キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所（編）, 2021, アク・ベシム（スイヤブ）2018. 帝京大学文化財研究所 , 223p.

内藤みどり , 1997, アクベシム発見の杜懐宝碑について . 加藤久祚 , 第６章　セミレチエの仏教遺跡 . シルクロード学研究 , 4, 中央アジア北部の仏教遺跡の研究 , 151-158.

中村俊夫 , 2016, 4. 2. 5. 出土木炭の放射性炭素年代 . 山内和也 , アマンバエヴァ , B.（編）, キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究　アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡　― 2011～2014年度―．　独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター , キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所 , 56-59.

山内和也 , アマンバエヴァ , B.（編）, 2016, キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究　アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡　― 2011～2014年度― . 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター , キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所 , 108p.

山内和也 , アマンバエヴァ , B., 櫛原功一 , 望月秀和 , 中山千恵 , 大谷育恵 , 平野　修 , 2019, 2018 年度アク・ベシム（スイヤブ）遺跡の調査成果 . 帝京大学文化財研究所研究報告 , 18, 131-203.

山内和也 , 小澤　毅 , 津村宏臣 , 相馬秀廣 , 安倍雅史 , 山藤正敏 , 芝康次郎 , 渡邊俊祐 , 森本達平 , ベグマトフ , A., 2012, キルギス共和国チュー河流域の考古調査、2011 年 . 第 19 回西アジア発掘調査報告会報告集 , 86-92.

山内和也 , 櫛原功一 , 望月秀和 , 2017, 中央アジア、シルクロード拠点都市の成立とその展開―キルギス共和国、アク・ベシム（スイヤブ）遺跡の調査（2016年）. 第24回西アジア発掘調査報告会報告集 , 66-71.

山内和也 , 櫛原功一 , 望月秀和 , 2017, 中央アジア、シルクロード拠点都市の成立とその展開―キルギス共和国、アク・ベシム（スイヤブ）遺跡の調査（2017年）. 第25回西アジア発掘調査報告会報告集 , 67-71.

山内和也 , 古庄浩明 , 中村俊夫 , 安倍雅史 , 2014, キルギス共和国チュー河流域の考古調査、2013年 . 第21回西アジア

発掘調査報告会報告集 , 31-36.

山内和也 , 森本　晋 , 安倍雅史 , 久米正吾 , 2013, キルギス共和国チュー河流域の考古調査、2012年 . 第20回西アジア発掘調査報告会報告集 , 46–51.

山藤正敏 , 2017a, アク・ベシム遺跡ラバト地区の考古学調査（2015 年秋季）. 帝京大学文化財研究所（編）, 2016 年度中央アジア遺跡調査報告会資料集 , 65-72.

山藤正敏 , 2017b, アク・ベシム遺跡ラバト地区出土土器の年代学的検討 . 帝京大学文化財研究所（編）, 2017 年度シルクロード学研究会報告集 , 47-53.

山藤正敏 , 城倉正祥 , 山内和也 , アマンバエヴァ , B., 2016, 唐代西域、砕葉鎮を探る―キルギス共和国アク・ベシム遺跡における発掘調査 . 日本考古学協会第82回大会発表要旨集 , 35.

Abe, M., 2014, Results of Archaeological Project at Ak Beshim (Suyab), Kyrgyz Republic from 2011 to 2013 and a Note on the Abandonment of Ak Beshim. Intercultural Understanding, 4, 11-16.

Clauson, G., 1961, Ak Beshim – Suyab. Journal of the Royal Asiatic Society, 1961-1/2, 1-13.

De la Vaissière, É., 2005, Sogdian Traders: A History. Leiden and Boston, Brill, 406p.

Kyzlasov, L. R., 2010, The Urban Civilization of Northern and Innermost Asia: Historical and Archaeological Research. Bucharest, Romanian Academy, Institute of Archaeology of Iaşi, 426p.

Vedutova, L.M., Kurimoto, S., 2014, Paradigm of Early Middle Age Turkic Culture: Ak-Beshim Settlement. Bishkek, Institute of History and Cultural Heritage, National Academy of Science of the Kyrgyz Republic, 166p. (In Russian and English).

Yamafuji, M., Jokura, M., Yamauchi, K. and Amanbaeva, B., 2017, Archaeological Research on the Rabat at the Ak-Beshim Site: Preliminary Report of the Autumn 2015 Season. In: iaSU2016 JAPAN Publication Committee (Ed.), Archi-Cultural Interactions through the Silk Road: 4th International Conference Mukogawa Women's University, Nishinomiya, Japan, July 16–18, 2016, Selected Papers. Nishinomiya, Mukogawa Women's University Press, 33–40.

Бернштам, А.Н., 1950, Труды Семиреченской Археологической Экспедиции Чуйская Долина. Материалы и Исследования по Археологии СССР, 14, Москва и Ленинград, Издателъство Академии Наук СССР, 157p.

Брыкина, Г.А., Горобунова, Н.Г., 1999, Фергана. In: Брыкина, Г.А. (Ed.), Средняя Азия и Далъний Восток в Эпоху Средневековъя. Москва, Российская Академия Наук, 93–113.

Горячева, В.Д., 2010, Городская Культура Тюркских Каганатов на Тянь-Шане (Середина VI -Нацало XIII в.). Бишкек, Кыргызско-Российского Славянского Университета, 302p.

Кожемяко, П.Н., 1959, Раннсредневековые Города и Поселения Чуйской Долины. Фрунзе, Академия Наук Киргизской ССР, 183p.

Маршак, Б.И., 2012, Керамика Согда V–VII Веков: Как Историко-Культурный Памятник. Санкт-Петербрг, здателъство Государственного Эрмитажа, 383p. (Marshak, B.I, 2012, Sogdian Pottery of the 5th – 7th Centuries as Historical and Cultural Phenomenon (On the Methods of the Study of Pottery Complexes). St. Peterburg, The State Hermitage Publishers. In Russian with English Summary).

Семенов, Г.Л., 2002, Суяб Ак-Бешим. Санкт-Петербург, Государственный Эрмитаж (Росстя) и Институт Истории НАН Кыргызстана, 175p. (with English summary).